名寄市立大学

買い物環境づくり研究事業
報告書

名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター

2022 年 3 月

巻頭言

2019 年 4 月 15 日、士別市と名寄市立大学は連携に関する協定を締結いたしました。この協定は、農村地域をはじめとする地方都市の共通課題である「買い物環境」について、士別市と名寄市立大学が連携を図り、住みなれた地域で安心して暮らし続けることができるまちづくりを推進するための研究事業です。

研究事業は、士別市多寄町をはじめとする農村地域の買い物環境の課題解決を目指し、調査研究事業を実施するものです。地域の特性と実態を正確に把握し、住民ニーズに即した効果的な取り組みを試行的に実施するとともに、持続可能な買い物支援対策の確立を目指します。また、それぞれの地域に合った買い物支援を複合的に行い、買い物手段の選択肢を増やすことで地域住民の不安解消と生活環境の改善を図るものです。

研究事業期間は 2019 年度から 2021 年度までの 3 年間です。その中身は、「研究事業の組み立て」「全戸聞き取り調査の実施」「実証実験への協力・支援」「調査対象地区でのワークショップ開催、地元住民を対象とした説明会」「調査研究の取りまとめ」などです。コロナ禍の影響もあり、1 年目に全ての調査を終えることができず、2 年目（令和 2 年度）に「買い物環境についてのインタビュー調査」を実施し、当初の研究事業計画を軌道修正することになりました。

人生 100 年時代と言われています。このような時代に、高齢者から若者まで、全ての国民に活躍の場があり、全ての人が元気に活躍し続けられる社会、安心して暮らすことのできる社会をつくることが重要な課題となっています（厚生労働省、人生 100 年時代構想会議「中間報告」）。こうした社会情勢の中、本研究事業の成果は日本社会において大いに期待されるものと考えております。

最後になりましたが、本研究事業の調査にご協力をいただきました多寄地区の皆々様に改めて厚く御礼申し上げます。

令和 4 年 3 月

名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター
元・センター長　関　　朋昭(元・名寄市立大学教授、現・鹿屋体育大学教授)
現・センター長　荻野　大助(名寄市立大学保健福祉学部教養教育部教授)

研究者を代表して

わが国では、高齢化や単身世帯の増加、地元小売業の廃業、既存商店街の衰退等により、過疎地域のみならず都市部においても、高齢者等を中心に食料品の購入や飲食に不便や苦労を感じる住民(いわゆる「買い物難民」「買い物弱者」「買い物困難者」)が増えてきており、「食料品アクセス問題」として社会的な課題になっている。殊に、本研究の実施主体である士別市や私たちが所属する名寄市立大学が所在する北海道上川北部地域も同様の問題が生起しており、従前の過疎化とその周辺の諸課題が山積する時勢にあって、解決の方向性は暗中模索の状況である。

買い物環境づくりや行動支援の問題を難しくする要因のひとつは地域性である。北海道では積雪時期のみ難民・弱者となる者が多いことや、過疎化の進行が懸念されてから年月を経ており、長期に渡り“不便”をごく当たり前のものとして受け入れてきたという、そもそも住民特有の“あきらめ”が存在することも示唆される。加えて、農村地帯特有の購買行動や地域住民の支え合いなどもあることが推測され、その実態を明らかにし基礎資料を作成することは喫緊の課題である。

本稿の射程もそのあたりにあるが、これらを検討する過程では、高齢者のみならず、地域住民の健康保持・増進や生活の質(QOL)の向上、子どもたちの教育などの観点も含め、コミュニティの維持を中核とする地域住民主体の取組みが、行政や民間事業者、NPO、有志のまちづくりを考える団体等がそれぞれ利点を活かしながら「買い物支援システム」としての構築と運営の可否にかかっていると推測できる。さらには、筆者らが所属する名寄市立大学や大学生がそのシステムのなかでどのような役割を担い得るかという論点もあろう。

先行研究では、「公共交通の衰退」「モータリゼーション」「まちづくりの担い手不足」「中心市街地の空洞化」など様々な論点から「買い物難民」「買い物支援」が語られている感があるが、筆者らは、地域住民の健康や QOL など、従前のいわゆる“不便”の視点に留まらない総合的な取り組みが求められているという問題意識がある。

以上を勘案しながら、本研究で示唆された概況を本報告書において示し、僭越ながら、今後についての意見を述べることとする。

買い物環境づくり研究事業主任研究員　松浦　智和
(名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科准教授)

目次

研究実施体制・・P1

第１部　先行研究の動向・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P3

第２部　アンケート調査結果
Ⅰ　緒言・・・P6
Ⅱ　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P7
Ⅲ　結果・・・P8
Ⅳ　小括・・P19

第３部　インタビュー調査結果
Ⅰ　緒言・・P23
Ⅱ　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P24
Ⅲ　結果
1. 買い物での困りごとについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P25
2. 現在の買い物の持続可能性について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P28
3. A コープの利用状況について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P33
4. 多寄での生活の満足度について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P40
5. まちづくりに関して若い世代や大学生に期待することについて・・・・・・・ P46
Ⅳ　小括・・P50
Ⅴ. 提言・・P51
Ⅵ.「買い支え」を再考する・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P54

研究実施体制（名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター）

センター長 (2021 年 9 月～)	荻野　大助	名寄市立大学保健福祉学部教養教育部教授
センター長 (～2021 年 8 月)	関　　朋昭	元・名寄市立大学保健福祉学部教養教育部教授 (現・鹿屋体育大学教授)
主任研究員	松浦　智和	名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科准教授
研究員	今野　聖士	名寄市立大学保健福祉学部教養教育部准教授
研究員	中島　泰葉	名寄市立大学保健福祉学部看護学科助手
研究員	結城　佳子	名寄市立大学保健福祉学部看護学科教授
事務局	若林　　智	名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター参事

第１部　先行研究の動向

わが国では、高齢化や単身世帯の増加、地元小売業の廃業、既存商店街の衰退等により、過疎地域のみならず都市部においても、高齢者等を中心に食料品の購入や飲食に不便や苦労を感じる住民(いわゆる「買い物難民」「買い物弱者」「買い物困難者」)が増えてきており、「食料品アクセス問題」として社会的な課題になっている[1)]。殊に、筆者らが所属する名寄市立大学が所在する北海道上川北部地域も同様の問題が生起しており、従前の過疎化とその周辺の諸課題が山積する時勢であり、この間は国、地方自治体問わず「買い物難民」や「買い物支援」の課題は検討されてきているが、周知のように低密度分散型居住である過疎地域においては、「採算性」「継続性」が最大の障壁となってきているとみてとれる。

用語の定義(買い物難民の学術的定義について)

そもそも、“買い物難民”と言っても、その定義は様々である(表 1)。本分野における問題提起は、イギリスのフードデザート問題が嚆矢である。このため、“買い物難民”を示す言葉として現在でもフードデザート問題という用語が使われている。しかし、問題背景は日本とイギリスで大きく異なっており、注意が必要である。イギリスにおけるフードデザート問題の背景、いわゆる発生要因は、主に移民の貧困問題から生じ、移民という構造的な低所得者層が十分に栄養価のある食料品を入手することができず、結果として栄養不足に陥っている問題である[2,3)]。

表 1　買い物困難者に関わる定義[6-8)]

	定義／提唱主体	特徴
買物弱者	・住んでいる地域で日常の買物をしたり、生活に必要なサービスを受けたりするのに困難を感じる人たち ・経済産業省「買物弱者応援マニュアル」	・「難民」の差別的な意味合いを弱めるために使用 ・流通的視点が強い
フードデザート	・社会的排除の一部。①社会的弱者が集住し、②食料品アクセスとソーシャル・キャピタルのいずれか、あるいは双方が低下したエリアを指す。 ・岩間信之編著『改訂新版フードデザート問題 無縁社会が生む「食の砂漠」』(2013 年、農林統計協会)	・イギリスの研究の流れを汲んでおり、健康被害まで視野に入れている ・地理学的視点を含有
食料品アクセス問題	・「自宅から 500m 以内に生鮮食料品店がなく、かつ自家用車を所有していない 65 歳以上の高齢者」 ・農林水産政策研究所「食料品アクセス問題の現状と対応方向、いわゆるフードデザート問題をめぐって」	・地理学的視点を含有 ・買物の中でも「食料品」に焦点を当てている

一方、わが国における本分野における主要な論点は“高齢者”の買い物問題である。特に食料品を物理的に入手できない(自身で商品を選択可能な店舗まで行けない)状況を指すことが多い。このため、日本における買い物難民問題は、フードデザート、買い物難民、買い物弱者、食料品アクセスなど多様な言い方が併存している。買い物難民という言葉は杉田氏が定義したもので、単に買い物が難しいという状況を指すのではなく、大店法を初めとした

政策展開によって“作り出された”との意を持っているため、自身の意図・行動の結果ではなく、陥ったものとして“難民”という言葉を充てている。よって、公的な場所ではやや使いづらく、一般的には“買い物弱者”と呼ばれることが多い(自治体・農林水産省・経産省など)。また、農林水産省はその性格から買い物一般ではなく食料品に注目しており、“食料品アクセス問題”という用語を用いている[4,5]。

一般的に日本では以下の 2 つの定義が良く用いられる。経済産業省の定義では、「買物弱者とは、住んでいる地域で日常の買物をしたり、生活に必要なサービスを受けたりするのに困難を感じる人たちのこと」とされ、農林水産省の定義(食料品アクセス問題)では、「生鮮食料品店までの距離が 500m以上かつ自動車を持たない人」とされている[6]。農林水産省の分析によれば、日本全体で約 700 万人の買い物弱者が存在し(買い物に困難を感じている人の割合 16.6%×60 歳以上人口)、それは地方部だけでなく都市部においても発生しつつある広範かつ一般的な問題となりつつある[7]。

文献

1)黒川智紀：過疎地域の買い物弱者対策における採算性及び継続性の研究．PPP 研究センター紀要，5：1-13，2015.

2)岩間信之：フードデザート問題，無縁社会が生む「食の砂漠」．農林統計協会，2013.

3)岩間信之：都市のフードデザート問題，ソーシャル・キャピタルの低下が招く街なかの「食の砂漠」．農林統計協会，2017.

4)杉田聡：買物難民 もうひとつの高齢者問題．大月書店，2008.

5)杉田聡：「買い物難民」をなくせ! 消える商店街、孤立する高齢者．中央公論新社，2013.

6)経済産業省：買い物弱者応対マニュアル Ver1~3．経済産業省，2010～2015.

7)農林水産政策研究所：食料品アクセス問題の現状と対応方向，いわゆるフードデザート問題をめぐって．農林水産政策研究所，2011.

8)一般社団法人日本食農連携機構，財団法人流通研究所：農山漁村の買い物支援マニュアル．一般社団法人日本食農連携機構，財団法人流通経済研究所，2012.

第２部　アンケート調査結果

Ⅰ 緒言

わが国では、高齢化や単身世帯の増加、地元小売業の廃業、既存商店街の衰退等により、高齢者等を中心に食料品の購入や飲食に不便や苦労を感じる住民が増えてきており、「食料品アクセス問題」として社会的な課題になっている[1,2]。平成 31（2019）年に農林水産省は、「食料品アクセス問題」に関する全国市町村アンケート調査を行っており、市町村のうち 1074（84.1%）市町村が対策を必要としていると回答したと結果を示した[3]。国として、買い物環境に関する施策や支援策の拡大への取り組みが求められている。

食料品の買い物での不便や苦労は、食料品へのアクセスの問題に他ならず、それらは、店舗までの距離などの空間条件や自動車利用の有無、年齢などの個人的条件に強く関連づけられると考えられる[4]。言うまでもなく食料品アクセス問題は、関心のあるごく一部の関係者だけの努力だけでは解決できない。行政、事業者、NPO、地域住民などの地域の関係者に加え、都道府県レベル、国レベルの関係者全体の協力が不可欠である。一方、この問題には、何らかの一つの決定的な解決方法があるわけではない。地域が変われば買い物をめぐる地理的、経済的、社会的条件が異なり、これに適した対策も異なる。このような地域の実情に応じた対策を考えるためには、関係者間での問題の現状についての共通認識が欠かせない[4]。

なお、筆者らが属する名寄市立大学が所在する北海道上川北部地域においても、高齢化による交通手段の喪失・散居による公共交通機関のカバーが困難・人口減少による店舗の撤退といった問題が複合的に生じており、その解決に向けた研究への取り組みが急がれている。

以上を背景に、本研究では、住民の QOL の向上に寄与すべく、士別市と名寄市立大学が共同で行ったアンケート調査の結果から買い物行動を中心に概況を把握し課題を明らかにするとともに、その持続可能性や今後の住民・行政・大学が一体となった課題の解決方法を検討することを目的とする。併せて、士別市が今後、地域住民が住みなれた地域で安心して暮らし続けることができる魅力あるまちづくりを推進するための基礎資料の作成を試みる。

文献

1)黒川智紀：過疎地域の買い物弱者対策における採算性及び継続性の研究．PPP 研究センター紀要、5：1-13、2015.

2)岩間信之：フードデザート問題、無縁社会が生む「食の砂漠」．農林統計協会、2013.

3)農林水産省：「食料品アクセス問題」に関する全国市町村アンケート調査結果．農林水産省食料産業局食品流通課、2019.

4)薬師寺哲郎編：超高齢社会における食料品アクセス問題－買い物難民、買い物弱者、フードデザート問題の解決に向けて－．ハーベスト社、2015.

Ⅱ　調査の概要

1)対象および調査内容

本研究では、多寄地区の住民 334 世帯を対象に、「多寄地区の買い物環境についてのアンケート調査」を実施した。調査内容は、①基本属性・家族構成・自家用車所有の有無、②日常の買い物状況、③買い物以外の食糧（家庭菜園・保存食の状況）、④出店を仮定しての利用の有無・意向、⑤買い物先までの移動手段・バス利用の 5 点とした。

2)実施方法

調査実施にあたっては、戸別訪問を行い、研究目的について説明し、本研究への協力を確認したうえでアンケート調査を行った。その結果、268 世帯から回答を得た(回答率 80.24%)。

◆調査スケジュール

2019 年 5 月：研究実施に関する意見交換

2019 年 6 月：プレテスト

全戸アンケート調査開始

2019 年 7 月：アンケート回収終了

3)分析方法

データの分析は、各項目とも単純集計により集計した。

4)倫理的配慮

本研究では、調査対象者に対し、士別市職員を通じて研究の概要や目的、個人情報保護に関することついて口頭・書面にて説明を行い、協力の同意を得た。また、参加の自発性について口頭にて確認した。

Ⅲ 結果

1. 回答者･家族の職業

職業では、「農業」38.06%と最も多く、次いで「会社員」8.96%、「公務員・団体職員」6.34%、「自営業」3.73%、「無職・その他」42.54%であった（表 1)。

表1 回答者･家族の職業(複数回答可)

項目	N	%
農業	102	38.06%
会社員	24	8.96%
公務員・団体職員	17	6.34%
自営業	10	3.73%
無職・その他	114	42.54%

註：%は実数を総回答数（268）で除したもの。

2. 日常の買い物の不便

買い物における不便さについて、表 2 に示す。「お店までの距離が遠い」62.31%の世帯が不便さを感じていた。多寄地区は、市街地から近郊店舗まで 5km 以上ある地域である。しかし、不便さを感じていない「特になし」が 26.87%と次いで高い結果であった。さらに、多寄地区は高齢者世帯が多い一方、約 9 割の世帯が自家用車を保有しており、住民の主な交通手段となっている。「車の運転が不安」11.94%と低い結果であった。

表2 日常の買い物の不便(複数回答可)

項目	N	%
お店まで距離が遠い	167	62.31%
特になし	72	26.87%
バスの利用が不便	36	13.43%
車の運転が不安	32	11.94%
家族などの手伝いがないと買い物に行けない	30	11.19%
荷物が重く、一度に少量しか買い物ができない	27	10.07%
その他	13	4.85%
買い物をサポートしてくれる人がいない	11	4.10%

註：%は実数を総回答数（268）で除したもの。

3. 買い物環境改善に必要なこと

買い物環境の改善では、「多寄地区にお店を出店」69.78%、「移動販売」32.84%と、住民は出店への思いが強かった。また、「送迎」や「交通の充実」といった交通手段への期待は小さかった（表 3)。自身でお店に向かい、欲しい商品を自身の目で見て選ぶことに住民は価値を見出していると考える。さらに、「特になし」と回答した世帯は約 15%という結果であった。

表3　買い物環境改善に必要なこと(複数回答可)

項目	N	%
T地区にお店を出店	187	69.78%
移動販売	88	32.84%
商品の宅配サービス	55	20.52%
市内のお店までの送迎サービス	48	17.91%
特になし	39	14.55%
バスなどの交通の充実	31	11.57%
家族の協力	24	8.96%
その他	10	3.73%
介護ヘルパーなどの支援	9	3.36%
近隣住民の協力	4	1.49%

註：%は実数を総回答数（268）で除したもの。

4. 市内での買い物の頻度

買い物の頻度（市内）においては、「週に 1～2 回」が最も多く、56.49%と半数を占めていた。次いで、「月に数回」18.70%、「週に 3～4 回」14.89%、「家族や友人などに頼んでいる」4.20%、「その他」3.05%、「ほぼ毎日」2.67%であった（表 4)。市内ということもあり、約 7 割の世帯が 1 週間に 1 回以上の買い物に出掛けていた。

表4　市内での買い物の頻度

項目	N	%
ほぼ毎日	7	2.67%
週に３～４回	39	14.89%
週に１～２回	148	56.49%
月に数回	49	18.70%
家族や友人などに頼んでいる	11	4.20%
その他	8	3.05%
計	262	100.00%

5. 市内での買い物に行く曜日

買い物に行く曜日（市内）においては、「特に決まっていない」73.13%と最も多く、次いで、「日曜日」13.81%、「土曜日」9.70%であった（表 5)。

表5　市内での買い物に出かける曜日(複数回答可)

項目	N	%
月曜日	10	3.73%
火曜日	14	5.22%
水曜日	12	4.48%
木曜日	7	2.61%
金曜日	14	5.22%
土曜日	26	9.70%
日曜日	37	13.81%
特に決まっていない	196	73.13%

註：%は実数を総回答数（268）で除したもの。

6. 市内で買い物に行く店舗

買い物に行く店舗（市内）は、「ビッグハウス」75.00%と最も多く、次いで、「ザ・ビッグ」64.55%、「西條」58.21%である。しかし、「小規模店・個人商店等」は 4.10%と圧倒的に少ない（表 6)。

表6　最近1ヶ月以内に買い物をした市内の店舗(複数回答可)

項目	N	%
ビッグハウス	201	75.00%
ザ・ビッグ	173	64.55%
西條	156	58.21%
ホーマック	155	57.84%
ツルハ	147	54.85%
コンビニエンスストア	103	38.43%
サツドラ	36	13.43%
小規模店・個人商店等	11	4.10%
その他	3	1.12%

註：%は実数を総回答数（268）で除したもの。

7. 市内で購入した品目

購入した品目（市内）においては、表 7 に示す。肉・魚・野菜・卵などの「生鮮食料品」93.28%と圧倒的に多く、“日持ちしない”品物へのニーズが大きい。また、パン・レトルト食品などの「一般食品」、「飲料」はどちらも 75%以上と高かった。

表7　最近1ヶ月以内に市内で購入した品目(複数回答可)

	N	%
生鮮食料品（肉・魚・野菜・卵など）	250	93.28%
一般食料品（パン・レトルト食品など）	203	75.75%
飲料	213	79.48%
日用品	173	64.55%
医薬品・化粧品	95	35.45%
衣類・雑貨	101	37.69%
家具・家電	15	5.60%
工具・業務用品	36	13.43%
その他	4	1.49%

註：%は実数を総回答数（268）で除したもの。

8. 市外で買い物に行く頻度

買い物の頻度（市外）においては、「月に数回」が最も多く 43.72%、次いで、「その他」25.51%であった（表 8)。市外の店舗は距離が遠く、交通費もかかり、移動時間を要する。品揃えは良いかもしれないが、アクセスの悪さがあり、その他の費用がかさむ。そのため、頻度としては少ないと考えられる。

表8　市外での買い物の頻度

項目	N	%
ほぼ毎日	3	1.21%
週に３～４回	11	4.45%
週に１～２回	56	22.67%
月に数回	108	43.72%
家族や友人などに頼んでいる	6	2.43%
その他	63	25.51%
計	247	100.00%

9. 市外での買い物に行く曜日

買い物に行く曜日（市外）においても、「特に決まっていない」と回答した者が 72.39%と多く、次いで、「日曜日」7.09%であった（表 9)。買い物に行く曜日に関しては、市内と同様、土曜日や日曜日といった週末に出掛ける割合が高かった。しかし、週初・週央ともに割合は低かった。

表9　市外で食料品や日用品の買い物に行く曜日（複数回答）

項目	N	%
月曜日	4	1.49%
火曜日	6	2.24%
水曜日	1	0.37%
木曜日	3	1.12%
金曜日	5	1.87%
土曜日	11	4.10%
日曜日	19	7.09%
特に決まっていない	194	72.39%

註：%は実数を総回答数（268）で除したもの。

10. 市外で買い物に行く店舗

買い物に行く店舗（市外）において、イオンやジャスコなどの「複合商業施設」が最も多く、57.84%であり、半数を占めている。次いで、ホーマックなどの「ホームセンター」が28.36%、「市外コンビニエンスストア」20.15%であった（表 10）。

表10　最近1か月以内に買い物をした市外の店舗（複数回答）

項目	N	%
複合商業施設（イオン、ジャスコなど）	155	57.84%
ホームセンター（市外ホーマックなど）	76	28.36%
市外コンビニエンスストア	54	20.15%
スーパーマーケット（ホクレンショップなど）	36	13.43%
百貨店（マルカツ、フィールなど）	31	11.57%
ドラッグストア（市外ツルハなど）	31	11.57%
その他	26	9.70%
小規模店・個人商店等	7	2.61%

註：%は実数を総回答数（268）で除したもの。

11. 市外で購入した品目

購入した品物（市外）において、表 11 に示す。「生鮮食料品」53.73%と半数を占めているが、市内に比べ割合が低かった。市外に出掛けることは、移動時間を要する。また、多寄地区に家電量販店が展開されておらず、「家具・家電」12.31%と高めの割合を示している。市外には複数のホームセンターやコンビニエンスストアが展開されており、市内の店舗では購入できない品物や品揃えの違いなど、市外に行くからこそ満たされる要因があると考えられる。

表11　最近1か月以内に市外で購入した品目（複数回答）

項目	N	%
生鮮食料品（肉・魚・野菜・卵など）	144	53.73%
一般食料品（パン・レトルト食品など）	121	45.15%
飲料	98	36.57%
衣類・雑貨	89	33.21%
日用品	83	30.97%
工具・業務用品	42	15.67%
家具・家電	33	12.31%
医薬品・化粧品	28	10.45%
その他	12	4.48%

註：%は実数を総回答数（268）で除したもの。

12. インターネットショッピングや宅配サービス

「インターネットショッピング」や、「宅配サービス」、「カタログ通販」の利用状況を表12に示す。トドックなどの「宅配サービス」を利用している割合が最も高く、28.73%であった。また、「利用していない（知らない）」と回答した者が45.52%と約半数の割合を占めていた。住民の約半数以上が何らかの通販を利用している。特に、食料品においては、3割弱が利用していた。インターネットショッピングや宅配サービスを利用している住民層を把握することが必要であり、一定のサービス向上も期待できるかもしれない。

表12　インターネットショッピングや宅配サービスなどの利用状況（複数回答）

項目	N	%
利用していない（知らない）	122	45.52%
宅配サービス（コープのトドックなど）を利用している	77	28.73%
インターネットショッピングを利用している（楽天、amazonなど）	67	25.00%
カタログ通販を利用している（ニッセン、ベルメゾンなど）	38	14.18%

註：%は実数を総回答数（268）で除したもの。

13. インターネットショッピングや宅配サービスなどの購入品目

購入品目において、「生鮮食料品」、「一般食料品」、「日用品」、「衣類・雑貨」が20%台、「飲料」、「医薬品・化粧品」、「家具・家電」、「工具・業務用品」が10%台を示している（表13）。各購入品目の結果に大きな偏りはないため、特定の商品を購入するというより、広く様々な品物を購入していると考えられる。

表13　インターネットショッピングや宅配サービスなどで購入したことがある品目（複数回答）

項目	N	%
衣類・雑貨	66	24.63%
生鮮食料品（肉・魚・野菜など）	65	24.25%
一般食料品（パン・レトルト食品など）	64	23.88%
日用品	59	22.01%
飲料	46	17.16%
医薬品・化粧品	35	13.06%
家具・家電	34	12.69%
工具・業務用品	28	10.45%
その他	14	5.22%

註：%は実数を総回答数（268）で除したもの。

14. 食料品・日用品の買い物１回あたりの支出額

買い物１回あたりの支出額は、「5,000 円～10,000 円」43.51%と最も高く、次いで、「2,000 円～5,000 円」38.17%であった（表 14）。約 8 割割の世帯は、買い物 1 回の支出額を 10,000 円以内に止めていた。

買い物場所が市内なのか市外なのか、積雪の有無など季節によって必要物品が異なるため、支出額は変動する可能性があると考えられる。

表14　食料品や日用品の買い物1回あたりの支出額

項目	N	%
2,000円以下	12	4.58%
2,000円～5,000円	100	38.17%
5,000円～10,000円	114	43.51%
10,000円～15,000円	29	11.07%
15,000円～20,000円	5	1.91%
20,000円～25,000円	2	0.76%
25,000円～30,000円	0	0.00%
30,000円以上	0	0.00%

15. 1 か月あたりの世帯食費

世帯食費においては、「25,000 円～50,000 円」51.53%と最も多く、半数を占めていた。次いで、「25,000 円未満」32.06%であった（表 15）。多寄地区全世帯の食費年間総額は、1 億 90 万～1 億 900 万円前後であり、1 人あたり 16 万円程度、1 世帯あたり 38 万円程度であった。北海道の食費年間総額 1 世帯あたり 43 万円程度と比べると、大きな差はないと考えられる。

表15　1世帯・1ヶ月あたりの食費

金額	N	%
25,000円未満	84	32.06%
25,000円～50,000円未満	135	51.53%
50,000円～75,000円未満	34	12.98%
75,000円以上	9	3.44%

16. 家庭菜園の有無

家庭菜園においては、「有り」83.58%と、多くの世帯が家庭菜園を持ち、自家野菜を栽培していた（表 16）。自家野菜として、ピーマン、アスパラガス、ジャガイモ、えだまめ、ナス、きゅうりといった多彩な種類の野菜を栽培していた。

表16　家庭菜園の有無

項目	N	%
有り	224	83.58%
無し	44	16.42%

17. 保存食製造の有無

保存食製造においても、「季節によってつくっている」53.01%、「年間を通してつくっている」27.44%と、約 8 割の世帯が保存食をつくっていた（表 17）。

表17　保存食製造の有無

項目	N	%
季節によってつくっている	141	53.01%
年間を通してつくっている	73	27.44%
つくっていない	52	19.55%

18. 自家野菜や保存食など、食品の分け合いの有無

自家野菜や保存食等の食品の分け合いにおいて、表 18 に示す。約 7 割以上の世帯が食品の分け合いを経験しており、多寄地区における地域コミュニティの特性の一つである。

表18　食品の分け合いの有無

項目	N	%
ご近所や知り合いに食品を分けてあげることがある	142	52.99%
ご近所や知り合いに食品を分けてもらうことがある	163	60.82%
分け合いはしていない	66	24.63%

19. 店舗利用意向 1～7

店舗利用意向を表 19～25 に示す。店舗利用意向においては、小括で述べることとする。

表19　店舗利用意向1（住民が運営するお店を利用するか）

項目	N	%
利用する	170	64.15%
利用しない	31	11.70%
分からない	64	24.15%

表20　店舗利用意向2（割高でも利用するか）

項目	N	%
利用する	114	54.81%
利用しない	38	18.27%
分からない	56	26.92%

表21　店舗利用意向3（品数が少なくても利用するか）

項目	N	%
利用する	128	60.66%
利用しない	26	12.32%
分からない	57	27.01%

表22　店舗利用意向4（露店形式でも利用するか）

項目	N	%
利用する	97	46.19%
利用しない	37	17.62%
分からない	76	36.19%

表23　店舗利用意向5（経費分担の可否）

項目	N	%
可能	26	12.32%
不可能	50	23.70%
金額による	80	37.91%
分からない	55	26.07%

表24　店舗利用意向6（ボランティア協力）

項目	N	%
可能	8	3.79%
不可能	113	53.55%
時期や時間が合えば可能	47	22.27%
分からない	43	20.38%

表25　店舗利用意向7(販売希望品目)[複数回答]

項目	N	%
肉類	118	44.03%
卵・乳製品	118	44.03%
魚類	115	42.91%
飲料	97	36.19%
パン・お菓子	85	31.72%
野菜	47	17.54%
日用品（衣類・雑貨・工具など）	31	11.57%
その他	14	5.22%

註：%は実数を総回答数（268）で除したもの。

20. 買い物先までの交通手段(2 位まで)

買い物先までの交通手段を時期別に示す（表 26)。春・夏・秋と冬を比較すると、どちらも「自家用車」を利用している世帯が圧倒的に多い。また、「自家用車」以外の交通手段においても、時期によって変動はしていない。「自家用車」は、住民の主な交通手段になっていると考えられる。さらに、公共交通機関である「バス」や「JR」を交通手段としている割合が非常に低い。

表26　季節別・買い物先までの交通手段(2位まで)

時期	手段	1位		2位	
		N	%	N	%
春から秋（非積雪期）	自家用車（自分で運転）	205	77.95%	11	8.40%
	自家用車（家族が運転）	38	14.45%	92	70.23%
	友人・知人の車に同乗	3	1.14%	8	6.11%
	バイク	1	0.38%	0	0.00%
	バス	11	4.18%	11	8.40%
	タクシー	0	0.00%	2	1.53%
	ＪＲ	0	0.00%	5	3.82%
	その他	5	1.90%	2	1.53%
冬（積雪期）	自家用車（自分で運転）	198	75.29%	14	10.53%
	自家用車（家族が運転）	41	15.59%	86	64.66%
	友人・知人の車に同乗	5	1.90%	7	5.26%
	バイク	1	0.38%	1	0.75%
	バス	13	4.94%	15	11.28%
	タクシー	0	0.00%	4	3.01%
	ＪＲ	0	0.00%	5	3.76%
	その他	5	1.90%	1	0.75%

21. 買い物にかかる 1 か月あたりの交通費

交通費においては、「4,000 円～5,000 円」が 20.93%と最も高く、次いで、「2,000 円～3,000 円」が 14.34%、「1,000 円～2,000 円」12.02%であった（表 27)。交通費の年間総額

は、1,500 万円程度、1 世帯あたり 5.5 万円である。

表27　1ヶ月の買い物にかかる交通費

項目	N	%
1,000円以下	17	6.59%
1,000円～2,000円	31	12.02%
2,000円～3,000円	37	14.34%
3,000円～4,000円	30	11.63%
4,000円～5,000円	54	20.93%
5,000円～6,000円	27	10.47%
6,000円～7,000円	8	3.10%
7,000円～8,000円	11	4.26%
8,000円～9,000円	8	3.10%
9,000円～10,000円	11	4.26%
10,000円以上	24	9.30%

22. バスの不便な点

バスの不便な点について、「乗りたい時間にバスがない」25.75%、「バス停までの距離が遠い」22.01%、「行きたいところにバスがいかない」21.27%であった。一方、「不便はない」と回答した者が 20.52%であった。多寄地区は路線バスが通っているが、主な交通手段は 19 でも述べたように、自家用車である。住民にとって、路線バスは馴染みがなく、利用されていない可能性が高いと考えられる。

表28　バスの不便な点（複数回答、最大3つ）

項目	N	%
バス停までの距離が遠い	59	22.01%
料金が高い	21	7.84%
乗りたい時間のバスがない	69	25.75%
行きたいところにバスがいかない	57	21.27%
不便はない	55	20.52%
その他	38	14.18%

註：%は実数を総回答数（268）で除したもの。

Ⅳ 小括

1. 食費の動向

全世帯の食費は年間総額 1 億 90 万～1 億 900 万円前後(262 世帯 664 人)と推計され、1 世帯あたり 38 万円程度、1 人あたりは 16 万円程度となる。このうち、1 割は消費税等とみれば、9,000 万円～1 億円くらいが推計値となる。これらは、外食と日用品費を除いており、実際に買い物に使われている金額はまだまだ大きい。今後、買い物環境を整備していく上で「買い支え」が論点になることは容易に想像ができるが、この中から、どのくらいの額を多寄の買い物環境改善にまわすことができるかは住民の議論として重要となる。

なお、これらの数字は回答しなかった 72 世帯は反映されていないことに加え、日用品や外食等の費用は含まれていない。すなわち、これらを加味すると、食費は 1～1.3 億円、日用品が全国平均で男性・約 2.4 万円/年、女性・約 10 万円程度/年であることから、多寄地区 664 人＋72 世帯(独居と仮定)すれば日用品費の推計は 4000 万円程度で食費＋日用品費は 1.4～1.7 億円となる。

2. 食費周辺の状況：交通費と買い物以外の食料

交通費(ガソリン代、バス代)の年間総額は 1,500 万円程度(258 世帯)であり、1 世帯あたり 5.8 万円程度となる。したがって、食費＋交通費は 1～1.2 億円くらいが推計値であり、移動のためだけにかかるコストはもっとも別目的に移しやすい。

また、買い物以外で食料を確保する術を多くの世帯が持っている。8 割の世帯が家庭菜園を持っており、さらに 8 割の世帯が保存食をつくっている。そして、8 割の世帯が食品の分け合いを経験しているという現状は、多くの世帯が家庭菜園を持ち、保存食をつくり、食品の分け合いを経験しているコミュニティの証左といえよう。したがって、野菜は購買行動の対象にはならない可能性があることに加え、筆者の経験則であるが、このような地域は食料の味・質に厳しくなる傾向があることも考慮する必要がある。

3. 買い物の不便

「距離」の課題も実は 6 割に留まっており、不便は「特になし」も 3 割近いという結果となった。また、「バスはそもそも利用しないので不便していない」とする意見も見られ、元より「多寄に住むなら仕方ない」との冷静さと諦めがあることは容易に想像できる。

他方、自動車の保有や運転が現状では同地域の生活の維持に欠かせないと思慮されるが、「車の運転が不安」とする回答が少ないことは状況を慎重に検討する必要がある。高齢ドライバーが関わる交通事故の発生は全国的に課題となっており、いずれ制度的に強制的に運転ができなくなる日が来る可能性もある。そのような趨勢になれば、一気に「不便」をする住民が多くなると思われる。

4. 買い物環境の改善

「店の出店」は 7 割の世帯が望んでいる。さらに「移動販売」が 3 割と次に多い。ここには、買い物は「自分で選びたい」という思いがある可能性が大きい。一方で、「送迎」「交通」への期待は小さい。また、約 15%の住民は「特になし」と回答していることも特筆すべきことである。

あらためて、店舗利用意向から、住民の店舗出店への期待が高いことが伺える。住民が地元の店舗に期待しているのは、来客への茶菓子や調味料が足りなかったときに“ちょっとしたもの”を購入できる店舗であった。しかし、課題となるのは、「品物の価格」、「利便性」、「品揃え」の何を優先し選択するのかである。また、出店したとしても、住民にとって身近な店舗でなければ続けられない。住民にとって身近な存在の店舗にすることも課題の一つであると考える。

住民が望むものすべてが現実的であるとは限らない。「食料品アクセス問題」において、地域・事業者・行政といった各々の主体が、役割分担を図りつつ、連携・協力を深めていくことが不可欠である。しかし、行政への過度な依存は事業の「継続性」を失わせる危険もあり、たとえ行政からの支援があったとしても、永続的支援が担保されるものではない。近年、近隣住民の地縁的関わりが希薄化しており、地域コミュニティの維持が困難である。しかし、この地区の地縁的関わりは強く、地域コミュニティは活発である。この強みを活かし、住民と事業所、行政が魅力あるまちづくりのために、どんな人が、どのような支援を求めているのか、問題の内容を把握し、現実的な持続可能性のある解決策を検討していくことが重要であると考える。

諸家が指摘する通り、住民が地域に対する責任意識を持ち「買い支え」を行う意識の醸成が求められている。「買い支え」は住民にとって負担の増加であっても、自らが高齢になり、「買い物弱者」となったときのための“投資”と考えるべきであろう。

住民に「買い支え」を頼るのは過酷な要求である。それでも「買い支え」がなければ地域の買い物環境は維持できないという現実がある。調査を続けていて感じるのは、住民と行政の温度差である。食料品アクセス問題の解決には、住民の力が必要不可欠であるが、温度差があっては住民の力を引き出せない。そのため、住民とともに同じ方向を向きながら取り組む地域の土台づくりが必要である。

5. 買い物環境と生活の質（QOL）、健康づくり

厚生労働省が 2000 年度から実施している「健康日本 21」は、健康寿命の延伸、生活の質の向上を実現することを目的としている。

高齢化の進展のなかで、疾患による後遺症や長期臥床によって要介護となる高齢者も増加する可能性がある。健康寿命の延伸、高齢者の生活の質（QOL）の向上を目指すためには、いかに健康を維持しながらできるだけ長く介護に頼ることなく快適な生活を送ること

ができるのか、アクティブな精神を持ち続け生活に満足を感じながら営んでいくことが大切である。同地区住民の生活満足度は非常に高く保たれている印象があり、生活環境の保持は重要な課題であると考える。

高齢者にとって外出は、自身の運動機能や認知機能を用いる機会であるため、健康維持に有効と考えられ、特に公共交通を利用した外出はより寄与があると考えられている。先行研究では、高齢者の健康が買い物の不便や苦労を軽減したと報告し、老化を遅延させ、できるだけ長く自立した生活を送れるようにすることが、食料品アクセス問題を改善する道筋の1つであると述べられているものもある。また、買い物満足度の向上が生活満足度向上の要因になっているとするものもある。既報の通り、買い物は、その機会を通して外出の機会を増やすことで身体機能や認知機能を維持し、自分の好きな物や欲しい物を見て、選択する自己決定・自己実現の場である。買い物という場は、生活全般を活性する意味を持っており、生活の質（QOL）に寄与すると考えている。

買い物に不便や苦労を抱えているということは、病院への受診・通院、市役所などの公共施設に行くことにも不便・苦労を感じているのではないだろうか。「食料品アクセス問題」は、不便や苦労だけではなく、健康問題や医療格差、地域コミュニティの枯渇による社会的孤立など、様々な要因が絡み合っていると考えられる。買い物環境を改善することは、地域住民の自立した生活を保ち、安心・安全な日常生活を担保することであり、結果として、生活満足度・生活の質（QOL）を向上することにつながると推測できる。

第３部　インタビュー調査結果

Ⅰ 緒言

わが国では、いわゆる「買い物難民」「買い物弱者」「買い物困難者」と言われる諸課題やこれらにともなう健康、生活の質(QOL)等の周辺課題の解決が求められている。そのような時代の趨勢のなか、名寄市立大学コミュニティケア教育研究センターでは、かねてより士別市との連携の下、士別市多寄地区をフィールドに住民の買い物環境等について実態調査を実施してきた[1,2]。殊に、買い物環境については、住民の食費や日用品費は全国の動向との大差はなく、店舗出店への期待が高いことや、住民が地元の店舗に期待することは「来客への茶菓子」や「調味料が足りなかったときに“ちょっとしたもの”を購入できる店舗」であることが示唆されたが、一方で、課題となるのは、「品物の価格」「利便性」「品揃え」と「採算性」のバランスをいかに両立し、かつ住民にとって身近な存在の店舗にし、「買い支え」を具現化できるかという点にあると思われた[2]。

翻って、買い物環境改善に向けては、その解決の一端として、買い物のみならず「まちづくり」や「健康づくり」「QOL の向上」などを活動の基盤とする、住民団体等の“担い手”や、店舗等に加えてサロンの機能を持つ“場”の創設にニーズがあることも示唆され、合築などを意図した複合的な視点からのアプローチを要することが明らかであった。さらに、その過程では、従来の官民連携を超えて、住民が主体的に取り組む持続可能な活動の形態を検討していくことが必要となることもまた明白であった。

そこで、本研究では、過疎・寒冷積雪地域である地域性も含めて北海道上川北部地域の士別市多寄地区をフィールドとし、住民の買い物環境への意識に関するインタビュー調査を実施するとともに、「買い物環境改善」や「まちづくり」について取り組む住民組織の活動(任意団体「多寄地区のまちづくりを考える会」、「多寄地区自治会連絡協議会」)に焦点を当て、これまでの取り組みについて基礎的な調査を行い、それらに寄与する活動のあり方について検討した。これらのことは、近年求められるソーシャルキャピタルの形成やコミュニティの維持・創出のための基礎資料にもなり得るものと思われる。

なお、本調査で得られた結果について、ワークショップを開催することで住民との共有を図り、同地区の未来のありようについて議論を進める予定であったが、現下の情勢により叶わなかった。今後、それらの開催を継続して検討したい所存である。

文献

1)中島泰葉，今野聖士，松浦智和：地域住民の買い物支援に関する課題と論点―健康づくり・QOL の視点も含めて―．名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター年報「地域と住民」，第 3 号（通巻 37 号），2019.

2)中島泰葉，今野聖士，松浦智和：北海道 S 市 T 地区における買い物環境づくりの取り組み ： 地域住民へのアンケート調査の結果を中心に．名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター年報「地域と住民」，第 4 号（通巻 38 号），2020.

Ⅱ　調査の概要

1. 調査対象者および調査内容

本研究では、「買い物環境に関するインタビュー調査」を実施した。これは，令和元年度に住民 334 世帯を対象に実施した「買い物環境についてのアンケート調査」を補完するものであり、アンケート調査では明らかにならない回答の周辺情報を丹念に探ることを目的とした。同アンケート調査は 268 世帯から回答を得たため、この 268 世帯を調査対象とした。調査内容は、①買い物での困りごとについて、②買い物行動の持続可能性について、③同地域に以前にあった店舗の利用状況について、④同地域での生活満足度について、⑤まちづくりに関して若い世代や大学生に期待することについて、の 5 点とした。

2. 実施方法

調査実施にあたっては、戸別訪問を行い、研究目的について説明し、本研究への協力を確認した上でアンケート調査を行った。

調査スケジュールは下記の通りである。

2020 年 9 月～2021 年 3 月：住民へのインタビュー調査

2021 年 1 月～2021 年 3 月　分析・解析

3. 分析方法

データの分析は、MS・Excel にてデータセットを作成し単純集計により集計した。

4. 倫理的配慮

本研究では、調査対象者に対し、士別市職員を通じて研究の概要や目的、個人情報保護に関することついて口頭・書面にて説明を行い、協力の同意を得た。また、参加の自発性について口頭にて確認した。

Ⅲ 結果

多寄地区 268 世帯のうち回答が得られたのは 144 世帯(回答率 53.7%)であった。なお,インタビュー調査に応じた人数は 160 人であったが、同世帯の者が複数見られたため、世帯主もしくはそれに準ずる者の回答を採用し、世帯数での集計を行うこととした。

以下に示すインタビュー調査の結果では、重複する内容も多くあるが、住民がどのように表現するかも記録することが重要と思われ、重複があっても表現が異なる場合は、研究者らの判断でそのまま記してある。

1. 買い物での困りごとについて(重複あり)

本設問の結果では、「困っている」とする者と「不便である」とする者、また「困りごとはない」とする者に大きく分かれたため、回答の内容から筆者らが以下のように分類した。先行研究では、困難と不便を同一の項目で分析しているものも少なくないが、本研究では現時点で困難があるとする者と困難はないが不便であるとする回答は分けて検討することとした。なお、どちらとも解釈できる回答は双方にカウントした。

また、表 2 以降に、それぞれの意識について、代表的な回答を記した。

以下の概況からは次のことが言えると思われた。

(1)住民の大半は「クルマがある」前提
(2)バスでの買い物は非現実的という意識高い
(3)「自分で、店で、選びたい」という思いが強い
(4)宅配サービスの利用はコスト面からもジレンマ
(5)「困っている」と「不便である」という表現は似てはいるが範疇が異なり、困りごとの解消と不便の解消は同様には扱えない可能性がある
(6)そもそも、3 分の 1 の世帯は困りごとも不便もなく、「仕方ない」と考えている

表 1　買い物での困りごとの意識(筆者らによる分類)　N＝144(複数回答あり)

困っている	(困ってはいないが)不便である	なし
51 世帯(35.4%)	109 世帯(75.7%)	49 世帯(34.0%)

表 2　「困っている」とする者の代表的な回答

・近くに店がない
・子どもに頼っているが，子どもの都合が優先される
・車の運転をやめたので出かけるのが大変になった
・バスを利用しているが便数が少ない
・何ひとつ買う場所がないのは困る
・来客など急な用事の時に困る
・ちょっとしたものが買えない
・車がないと不便

・孫が来た時にすぐにお菓子を買ってあげられない
・何か足りないものを買う時に不便
・宅配サービスを利用しているが，手に物を取って買えない
・店だけでなく，郵便ポストも遠い
・地元に店がないからすぐに欲しいものが買えない
・車で士別や名寄に行っている
・運転免許を返納したので困っている
・まとめ買いしかできない
・地元の店がなくなっていかに不便な地域かがわかった
・雪で道がなくなる，吹雪で運転が難しい時がある
・店がない冬場は天気次第になってしまう
・いざとなったときに店がないので不安。昔は店もあったので時代の流れか。不便を感じている
・買いだめするが冷凍にも限度がある
・目が悪いため運転も厳しい時がある。天気が悪いときも運転できない
・店がないから全体的に困っている。鉛筆１つ買うこともできない
・自分は車を持っているが，ない人は不便であり，誰かに頼む必要がある
・宅配サービスなどを利用しているが，揚げ物ばかり，かつ高い
・材料がそろわないときに苦労する。車運転していない
・野菜を傷めないようにするのが大変
・バスで士別に行くとなるとたくさんは買えなく，料金も高くなってしまった
・宅配サービスを利用しているが，届いたときには不要になっていることもある。また，自分に丁度いい量のものが売っていない
・人にも頼みづらく，周辺も空き家になってしまった
・自宅前に普通便のバスが停まるが，荷物が多いので利用しない

表３　「(困ってはいないが)不便である」とする者の代表的な回答

・近くに店がない
・車を使用しているが，年齢的に厳しくなってきた
・地域に店があってほしい
・冬に車を乗るのが怖い
・ちょっとしたものが買えない
・車がないと不便
・除雪が来なかったら不便
・何か足りないものを買う時に不便
・飲み物やパンと言ったちょっとしたものが買えない
・バスの本数が少ない。
・店舗がなくなって不便になったけど慣れた。車に乗れるが，近くにお店があった方がうれしい
・店舗がなくなったので，よく頼んでいた仕出しに困っている
・店がなく，足りないものが買えない
・店だけでなく，ポストも遠い
・車で買い物はできるが，逆に言うと車で行かなければいけない（歩ける範囲に店がない）
・車に乗れるからまだいいが，買い物自体が不便
・士別まで行かないといけないのは不便
・冬場は天気次第になってしまう。宅配サービスも利用している。いざとなったときに店がないので不安。昔は店もあったので時代の流れか。不便を感じている
・店が近くにないと少し不便を感じる

表４　「困りごとはない」とする者の代表的な回答

・車があるから今のところはない
・同居の家族が連れて行ってくれている
・週に１回子どもが来て買ってくれる
・宅配サービスでは好きなものは買えないが，不便しているわけではない
・車はないのでバスを利用しているが困っていない
・宅配サービスで十分足りている
・子どもの通学で市街地まで行かざるを得ないのでそのついでに買い物をする
・新型コロナウイルス感染拡大を懸念しているのでそもそも買い物に出かけない。宅配サービスで済ま

せている
・地域に店舗ができれば嬉しいが，なくても不便はない
・地元に小さな店があっても，結局は市街地や隣町の大きな店舗に行くと思う
・物がなくなる前に補充する習慣を身につければ問題ない
・病院へいかなければならないので，店がないことより病院がないことの方が心配

2. 現在の買い物の持続可能性について（いつまで続けられそうか）

本設問の回答を表 5 に示す。また、本設問の回答から推測されることは以下の通りである。

(1)車の運転が生活のベースとなっており、免許返納予定はそれぞれ立てている(10 年以内を見込んでいる住民が多い)
(2)多くの人が多寄で人生の最期まで暮らせないと考えている
(3)買い物は自分よりも配偶者や子などの家族次第
(4)運転免許返納時期が多寄での生活を諦める時と考えている住民が多く、それは決して遠い未来ではない
(5)移動販売は不可欠
(6)近隣住民の助け合いは必要と考えるものの、他人には頼みづらいという意識
(7)農業関係者を中心に、仕事から退くまでは生活も買い物も続けられると考えている
(8)バスなどの公共交通の必要性を問う声は少ないが、それしかないという住民にとっては最重要課題となる

表 5　現在の買い物の持続可能性

・何カ月ももたないと思う
・タクシーを使うしかないのかと思っている
・市営住宅の空きがでたら入りたいけど入ったところで町に店がないのがネック
・車に乗れなくなったらどうしよう
・車に乗れなくなるまではなんとかなる
・娘に欲しいものを頼めなくなるまで
・歩けなくなったり、バスの本数が減ると不便だと思う
・通院の都合で母を送り迎えしている
・娘に止められるまでは車に乗ろうと思っている
・乗れなくなったら娘に頼ろうと思う
・元気なうちはトドックを使ってここで暮らしたい。体壊したら他地域の娘に連れていかれそう
・いつまでもは無理
・車が乗れなくなるまで。バスに乗って市内に出ても、荷物を背負って帰るのが難しい
・士別市内に移り住む予定
・別の町に住むことも考えている
・今年免許更新を行うが、次はどうするかわからない
・バスは荷物が重くあまり利用できない
・A コープがなくなった時は正直焦った
・自分が車に乗れなくなった時にこの町に住んでいられるのか不安
・車に乗れないと不便だと思う
・今年免許切り替えで、あと 1 回はしたい
・車をやめたら用足しできない
・トドックを利用している
・歩けるまで、その後は施設か病院にいる
・病院に行った帰りなどに士別に寄る
・あと 5 年くらい
・トドックは実際に見て購入できないから好きではない
・免許返納後はバス利用や施設入所も考えている
・動けるうちは車に乗りたい。迷惑をかけない間は・・・
・ネットがあるから大丈夫と予想
・車に乗れる間
・だんだん厳しくなっている
・85 歳になったら免許を返納する

・バスか自転車で買い物を続けたい
・返納したら、後継者がいないため士別の市営住宅に入る
・車は持続していきたい。トドックの利用や家族への頼みが多くなる
・運転免許を返納するまで
・移動販売があるといい
・10～15 年は運転したい
・トドックやタクシーを使うかも
・80 歳ぐらいまで
・近所に息子がいるので、車を頼める
・元気ならあと 10 年くらい
・トドックが便利なため使うかもしれない
・80 歳くらいまで
・今はまだ元気だけどこれからどうなるかわからない
・80 歳まで。その後は街に出る予定
・あと 10 年。70 までは大丈夫。80 過ぎても運転する人いるけど危ないと思う
・息子と住んでいるので問題はない
・運転免許を手放すまで（80 歳くらいまで）
・自分の足で行ける場所に店が欲しい
・75 歳くらいまで。冬は基本的に運転していない
・息子が多寄中心部にいるため、農家もやめたのでここから出ようかと考えている
・車は継続して使いたい。
・バス停までも遠いため、車が使えなくなった場合は、近くに住む息子夫婦を頼ることになる。
・多寄を出るつもりはない
・妻（69 歳）はあと数年
・冬場は 3 年目
・車がなくなったら移る
・10 年くらい
・数年間は大丈夫だと思いたい
・難しくなったらどこかに移り住む
・バスがあるため、足腰がいい間は大丈夫
・今はまだ考えてない。息子も家にいる
・生協・通販・バスを車が使えなくなったらこれ使う
・車に乗れるうちは大丈夫
・昔から生協を利用していたため、それを継続して利用する予定
・免許を返納したらバスで買い物に行くよりは生協を利用する
・10 年くらい
・送迎を考えている人もいるが、行政の都合で行えない
・配送サービスを考えている
・車の運転ができなくなるまで
・あと 10 年は乗りたいけど、夫がどうなるかがわからない
・若い人(家族)と暮らしているのでこれからも生活は続けられると思う
・しばらくは続けられるのでは
・仕事で車を使っているし、車に乗れなくなったら都会に行くことを考えている
・老後の不安はそんなにない
・車に乗れなくなるまで
・バスがあるが本数が少ないのが問題
・年をとったら引っ越す予定
・10 年は続けたい。宅配利用（最近）
・車に乗れなくなるまで
・車に乗れなくなるまでは現在の買い物手段を継続したい。10 年くらい
・70 歳ぐらいまで乗るとは思う。トドックを利用しているので大きく困ることはないが、車に乗れなくなった時に足りないものが買えなくて不便すると思う
・あと 10 年は運転したい
・健康ならさらに継続したい
・買い物に近所の住民も誘ってくれる
・5 年くらいは持続させたい
・遠方にいる娘さんがトドックで頼んでくれている
・免許を返納したくても車がないと生活できないから返納できない
・20～30 年

・温泉にバスは来るが、家からは遠い
・次の更新で終わり
・夏は本人が運転。冬は子どもに頼む
・先のことは考えていない。息子もいるから
・免許返納（現在は 60 歳くらいで考えている）
・車がなくなれば配送サービスを検討する
・住んでる間は。元気なうちは
・あと 20～30 年。今後はいまのところ未定
・10 年くらい。体と話し合って決めたい
・75 になるまで。なるべく運転したい
・農家を辞めたら後継ぎがいないため、多寄を出る
・車に乗れるまでだからあと 3 年、80 歳を過ぎたらやめる予定
・バス路線が変更するからそれを利用する
・70 歳くらいまで
・車が使えなくなったら何か利用するというよりは都市部への転居を考えている
・3 年くらい（車）
・車に乗れなくなったら市内に移る
・80 歳くらいまで。事故があっても怖い
・バスが目の前だが本数少ない
・20 年後多寄がどうなっているか
・車が使えなくなるまで、でもまだ考えていない
・コープは少し高いから欲しいものがあった時だけ利用して、食品は店舗で買う
・車に乗れなくなったら困る。80 歳まで
・バスも近くにないから大変
・夫が運転できなくなるまで
・75 歳くらいまで
・便利なところに行くかもしれない（子供が札幌にいる）
・福祉タクシーやバスの利用を検討している
・80 歳くらいまで
・元気なうちは多寄にいたい
・10 年、20 年経って息子が車を使えなくなるまでは持続したい。
・トドックの利用や、移動販売・移動サービスの利用なども検討する
・まだ見通しはない
・近くにバスがあるから、まだ考えてない
・車に乗れなくなるまで
・いつまで元気でいられるか"
・身体壊したら多寄には住んでいられないかな
・あと 10 年くらい
・免許返納後については考えていない
・あと 10 年
・足が不自由で、バスがないから不便
・免許更新した　乗れなくなっても住み続ける　後継者いるから
・運転は 80 歳くらいまで
・10 年くらいは続けられそう
・あと 10 年は運転したい
・10 年続けたいけど難しい
・子供のことを考えたら空港の近いところに行くかもしれない
・トドックの利用を考えている
・70 代くらいまで（20 年先）
・子どもと同じところ。若しくは生協等利用して多寄で生活
・買い物に限らず、このまま公共交通機関が整わないなら多寄から出ていくこと考えなくてはいけない
・買い物以外でも不便なことは多くある
・10～15 年くらい、80 歳くらいまで
・近くの娘に持ってきてもらったり、通販やコープを利用している
・吹雪くと道がなくなるため、外に出るのも困難
・車に乗れなくなるまで
・乗れなくなったらここに住んでいられるかわからない
・車に乗れなくなれば、名寄の息子に頼る
・10 年後ぐらい

・車に乗れるまで
・トドック利用しているからまだいいけど、車は必要
・現在 70 歳　数年後が心配　病気やケガもある
・汽車に乗って風連で買い物や病院へ
・75～80 歳くらいまで
・娘しかいないため、農家を辞めて士別市内に移り住みたい
・父も運転しているが 85 歳くらいまで
・あと 20 年
・65 か 70 歳まで、大きな事故があるとわからない
・名寄に買いに行くときは娘かバスで送ってもらう
・士別の母に会いに行くついでに買い物をする
・75 歳の講習までは車の運転を続けたい
・車を運転しなくなると近くで買い物できる方がいい。自分の目で見て買い物したい
・75 歳以降はトドックの利用や、市内の娘夫婦に頼るなどを考えている
・85 歳くらいまでは。目が見えにくい、体が思うように動かないときは厳しい
・トドックは登録して利用している
・81 歳の免許の更新まで　バスやトドックを利用して生活予定
・次回の免許切り替えで終わりにしたい。80 歳までは乗る気がない
・隣に息子夫婦が住んでいるため、頼ろうと考えている
・近くにバス停があるので利用したい
・80 代まで。士別の無料バスや電車を利用
・あと何年か。車に乗れるうちは
・冬場の運転が不安。食べ物だけでなく、薬などもある。先が不安
・子どもから札幌に来るように言われているため、買い物ができなくなれば引っ越す可能性もある
・今は体の状態が良いから大丈夫　来年には 90 にもなるため、いつ自分は動けなくなってもおかしくない
・80 歳くらいで免許返納するまで
・来年免許の更新だが、次の免許更新で厳しい
・100 円で乗れるバスで市内まで行こうかと考えているが、厳しいと感じている
・士別か旭川への引っ越しも視野に入れている。店の前で降ろしてほしい
・今の時点で夏は乗れているものの冬場は不安が多くほとんど運転していないので、車を使わなくなるのも時間の問題ではないか
・生協でほとんど賄う生活になるのではないか
・野菜は甥の農家や自分の畑で作っているため、ほとんど買わない
・20～30 年で考えている
・夫が車を運転できなくなるまで
・まだ 60 代だからしばらくは大丈夫だと思う
・今のところ考えていない
・免許と車どちらかガタが来るまで。あと 5～6 年くらい
・来年ぐらいには厳しくなりそう。いざとなれば隣に住んでいる息子に協力をお願いする
・自分の身体が健康なうち
・週に 1 回士別（ツルハ・西條）に車で。名寄には病院に行くついでに買い物をする時がある
・トドックは昔利用していたが、到着に 1 週間かかるためやめた
・車はあと 5 年くらい乗ろうと考えている
・バスを利用、士別の子供たちに頼る
・多寄に住み続ける予定
・まだ考えていない
・車を手放したときのことも考えていない
・車に乗れる間は大丈夫
・あと 3 年
・車がなくなったらバスを利用する予定
・これから 7～8 年は車に乗りたい
・乗れなくなったら移動販売を頼むしかない
・コンビニがあると嬉しい
・週に 1 度くらい士別まで車に買い物に行く。基本はほかの用事と合わせて買い物に
・名寄のイオンはたまに行く。トドックは利用していない
・車がつかえなくなったら旭川や士別に移住
・4～5 年。不安。車で買い物に行けばたくさん買える。健康であればいいが…
・車がなくなったあとが心配

・車がなくなるまで、バスはおっくう。不安である
・死ぬまで車には乗りたい
・天気とチラシを見て行く
・運転はあと 10 年
・夫婦なら買い物の荷物を持ってもらえる
・ひとりになったら士別の市営住宅に入りたい
・元気なうち
・トドックも利用している
・70 歳過ぎくらいまで
・多寄から離れたくない
・乗り合いバス（週 2～3 回）で、お店からもガソリン代の補助をすればいいのではないか
・"ヘルパーに頼んでいるため、持続可能である
・子供が札幌に住んでいるため、引っ越しも検討している
・免許返納まで
・つい最近更新したため、あと何年かは大丈夫
・あと 10 年くらい。80 歳近くになったらやめたい
・長生きできたときは困る。
・バス・電車が近くにあるから利用したいが、足腰悪くなったときなど困る
・今後車に乗れなくて困ってくるのではないか。
・何十年か後は厳しいのではないか
・長く続けるのは難しい
・現在 86 歳であと 10 年くらいは続けたい。奥さんは 83 歳でぎりぎりまで乗り続けたい。
・車が乗れなくなったら困りはするが、トドックなど利用して住み続ける予定
・これからも元気か保証がない
・身体を壊したときに不安
・まだ車が乗れなくなった時のことは考えていない
・80 歳ぐらいまで乗りたいが、無理かもしれない
・息子夫婦がおり、トドックもあるので続けてはいける
・10 年程度は大丈夫
・車が使えなくなったら市内のほうへ引っ越しも
・車での買い物生活。現在 76 歳のため、80 歳を区切りとして。3，4 年は続けられそう
・風連で買い物することはあるが大体は士別でクラブに行くついでに買い物
・まだ車を利用できるが冬は心配
・歩くほうが怖い
・娘も元気でいるから、恵まれている方ではないか
・車が運転できるまで
・2020 年の誕生日で免許を返納予定。3 人の子供たちや地域の人に協力してもらい維持
・200m くらいしか杖を突いても歩けないので、バスだけでの買い物は厳しい
・身体が動かなくなるとバスにも乗れなくなる
・施設に入ると楽になるが、体調と金銭面から入りにくい
・運転はあと 1、2 年
・冬は苦しい
・暗くなると乗らない
・15 年くらい
・バスで行く
・あと 2、3 年、85 歳くらいまで
・車がなくなったときのことは考えていない
・あと 7、8 年
・夫婦二人でいる限りは多寄にいたい
・病院に行くついでに士別で買い物
・生協は続けるつもり
・多寄に店ができたら利用したい
・75～80 歳まで、今から 10～15 年くらい
・バスと汽車を利用予定
・1 人になったら市営住宅も考えている
・15 年くらい
・多寄から出るかもしれない
・多寄に店があれば便利

3. A コープの利用状況について

本設問の回答を表 6 に示す。また、本設問の回答から推測されることは以下の通りである。

(1)週 1～2 回とまったく利用しなかったという住民が多い
(2)A コープのみで買い物を済ませていたとする住民も少ないが一定数はいる
(3)農繁期に利用という地域特有の背景
(4)経営者夫妻との交流を楽しみにしていた
(5)買う物は「ちょっとしたもの」
(6)菓子/パン/飲み物/アイスクリーム/調味料
(7)値段、品揃えについては厳しい声が多い
(8)復活を望む声は大きい
(9)なくなったことへの住民としての後悔
(10)そもそも採算性は合わないに決まっているとする声は多い
(11)仕出しやジンギスカンなど、経営者の努力により地域に必要とされていたことが窺がえる。

表 6　A コープの利用状況について

・風連の方が近いため、風連の方に行くことが多かった（学校など）
・多寄に店があったら嬉しい
・今は不便
・めったに利用していない
・士別、名寄の大きい店に行っていたので多寄に大きい店ができないと行かない
・週に 1 回 A コープの配達を利用していた
・A コープのようなものがあればいいが、自分は利用しない
・移動販売については考えていなかった
・ずっと利用していた。自転車に乗って買い物のすべてを A コープで賄っていた
・自転車に乗れなくなったので、市内に新しくできても利用はしないと思う
・仕事帰りなどでちょこちょこ寄っていた
・週に 1．2 回
・食料品がほとんど
・パークゴルフの帰りに月 2 回ほど　豆腐、地元の野菜、日用品など買っていた
・品揃えは日替わりで野菜とか変わっていた
・値段は少し高かったが許容範囲
・生ものやお総菜などは購入せず
・気が向いたときに利用していた。自分で行けたため
・無いと不便
・遠くまでは出歩けないので、不満もあったが使っていた
・卵や牛乳以外の食料品など。肉、魚　野菜は自給自足
・夫は毎日タバコと酒（畑の見回りのついで）
・作業着などでも気軽に入れた
・知った人ばかりで店の人にも物の場所など訪ねやすい
・高いとは思ったが、時間優先。復活してほしいとは思う
・週 3，4 回
・おかず、総菜など
・A コープは行っても欲しいものが置いていないことがある
・値段も高いため士別によく行っていた

・移動販売は車があるから特に考えていない。最終手段
・週に 1，2 回
・出面さんが来ているときはパンなどを配達してもらっていた
・お惣菜のできる時間に行って、食卓に並べていた
・まとめ買いは士別で行っている
・用事があれば遠くの店に行くが、基本は A コープを利用していた
・野菜は作っているため、移動販売よりも A コープのように調味料などが売っている店がいい
・A コープの代わりに風連の Q マートに行っている
・傷みやすいものを買っていた
・士別のほうが安いしポイントもつく
・近くに店があれば急に客人が来た時に便利
・ただ歩けなくなると近くの店やバス停まで歩くのも難しい
・月に 2 回、ちょっとしたものを買う程度
・品揃えが悪く、値段も高いため利用は少なかった
・近くにあれば利用するが、経営が成り立つかはわからない
・酒屋なら売れるだろうが、生ものはあまり売れないと思う
・結構利用していた。ほぼ毎日。お菓子とか。夜遅いから
・車に乗って士別まで行くことが多い
・A コープでは買い忘れた時やジンギスカンを買っていた
・コンビニが欲しい、ちょっと足りないものを買う時に利用したい
・月に 1,2 回利用していた
・注文すれば品物を買えるようにしてくれるが、店に常に置いているわけではなかった
・便利な士別や名寄でまとめ買いすることが多かった
・個人の店はいいが値段が高い
・値段が高く、品揃えが悪いため、あまり利用していなかった
・スーパーはなくても、コンビニエンスストアがあると嬉しい。
・近くには風連のQマートがあるため、困りはしない。
・品数や値段の関係から利用することは少なかった
・店主に個人的に野菜を買ってもらったり、蕎麦を店においてもらっていた
・月に 1,2 回、忙しい時に利用した
・おやつや飲み物を買っていた
・やってくれる人がいるならばぜひ欲しい
・月 2 回
・復活してほしい
・士別を多く利用していた（2 日に 1 回）
・値段が高く品ぞろえは少なかった
・週に 1 回、牛乳、納豆、お菓子、卵を買っていた
・農家の人は自給自足しているため、こういったものを買いたい
・A コープは品数が少なく、ないものが多いことと単価が高かった
・店は欲しいけど、できたところで経営が成り立つかわからない
・月に 1 回食料品を買っていた
・士別のスーパーをメインで利用していた
・店の人とはそれなりに交流があった
・無くてもいいけど不便。用事がある時のついでに月に 1,2 回。ジンギスカン、総菜、作業着など頼めば注文とってくれるから
・月に 1 回使っていたかどうか
・たまにお菓子を買ったり急に必要になったものを買っていた
・A コープでは値段が高かったため、士別や名寄と同程度の金額で買える店が欲しい
・週 1 回行くか行かないか。農繁期によく利用していた
・作業着や食料品をよく買っていた
・コンビニがあれば行くかもしれない
・生協は動かなくなれば使うかも。自分で見て買い物したい
・クリーニングなどを利用してはいたが、買い物はあまり行わなかった。ついでにアイスを買ったり
・独自で販売しているジンギスカンを買ったりはしていた
・値段は高く、品ぞろえも悪かったが、仕事が終わる時間だと営業時間に間に合わないことが利用しなかった理由である
・スーパーなどがあれば嬉しいが、時間的に利用できるかはわからない
・おかずやお弁当、お菓子を買っていた
・高いから暇なときは遠くの店に行っていたが、4～10 月の忙しい時は利用していた

・結構使っていた
・用事で出かけるときなど
・パン、菓子、魚、調味料
・品揃えが他店に劣り、ちょっと高い
・値段が高かった。日曜も休み
・夜のちょっとした買い物は近いほうが楽
・冬は外に出たついでに、夏は忙しくなると配達を頼んでいた
・あると便利だった
・新しいものを少しずつ買いたかった
・年末年始のオードブルを買っていた。週１でちょっとした物を買っていた。
・地域での催しの際に不便（オードブル・景品）
・週に１回くらい、豆腐などを買うのに利用していた
・組合での買い物や買い忘れをしたときに利用していた
・値段が高く品ぞろえも悪かったため利用は少なかった
・月に 1,2 回
・A コープも遠かったため、農協に行ったついでに利用していた
・出かけるついでに名寄に行っていた
・コンビニができても総菜を買う習慣がないし、おかずが売っていたとしても名寄で買うと思う
・月に１回あるかないか
・ジュースといった飲み物
・コンビニができたら行く
・農協に行ったときにお菓子を買うなどで週に１回利用していた
・年々品数が少なくなっていた
・新鮮なものは大きな町で買っていた
・トドックを利用しており、子供もいるから買ってきてもらえる
・月に 2．3 回
・おかずやお菓子を買っていた
・士別まで出られない生活になったら利用したかもしれない
・自転車に乗れる夏は時々利用。食材を購入（おやつ・仏さん用のもの）
・品数が少なく物価も高かったためほとんど利用していない
・週に１回くらい、たばこを買っていたためすぐに買えなくなりつらい
・客人用の菓子とか宴会用のジンギスカンが士別まで行かないと買えなくなった。A コープでは融通がきいた
・2 割くらい
・A コープに売っているとわかっているものは買うが、大体は士別に行ったついでに買っている
・新しい店は品揃えが良ければ利用するが、パンやお菓子メインになると思う
・月に 2 回ほど、ちょっとしたものを買っていた
・2 週に 1 回　食品　おやつなど　無くなって不便
・2，3 ヶ月に 1 回
・足りないものを買っていた
・月に 1 回ほど
・ジンギスカンや足りないものを買っていた
・多寄にお店があったら利用したい
・値段が高いためあまり利用していなかった
・用事がある時の仕出しや飲み物を頼んでいた
・利用なし。バスで士別に行ったほうが早い
・週に１回程度調味料など足りないものを買っていた
・週に 2,3 回、調味料や卵などいつも使うものを買うことが多かった
・年配の方のことを考えると小さくても店があるといい
・有料ごみ袋を買いに行くのが難しい人のために、多寄の商店が設置してくれた
・出かけた行き帰りにお菓子を買っていた
・ずっと買っていたこんにゃくが買えなくなった
・A コープの人とは昔からの知り合い
・店も敷地のお金がかからなければ成り立つのではないか
・ちょっとしたもの。めったに行かない。用事のついでに。月に 2 回くらい
・月に 1，2 回、魚やアイスを購入していた
・そのほかにも、士別で買い忘れたものや急に必要になったものを買っていた
・日用品は士別で週に 1 回買っていた
・金額が高くないのであれば近くに店が欲しい

・あれば便利。買い物忘れ、急な来客時。田植え時期はお弁当を届けてもらっていた
・品数・値段も満足いくものではなかったが、利便性が勝っていた
・そんなには使っていなかった。足りなくなった物、パンや飲み物、お菓子など
・大きいところと違って高かった。そこそこ揃ってた。品数とかは特に不満なし
・週に１回、食品、日用品、配達もしてくれていたから助かってた
・農家忙しくて配達が有難い
・物を運ぶのが大変なため、親切なスーパー欲しい
・それなりに　ちょっとしたものはコープで
・高いため、士別に行くほうがよかった　下川の Q マートも高かった
・今は店がなくてもいいが、車が無くなるときには欲しい
・30％くらい利用していた、どこか裏町に出たらついでに買っていた
・おやつやジンギスカン、加工品、豆腐、士別農園のものを買っていた
・地元にしかないもの、こだわりのものがないのが不便
・週に１回、麺などすぐに食べられるものを買っていた
・よく行っていた　しかしそれ以上に士別に行っていた
・高い印象。安い時に買う
・車がなくなるころにまた戻ってきてほしい
・ちょっとは行っていた
・ジュース、たばこ、菓子、酒など
・無くなって不便
・品揃えが悪く、高い
・生鮮はもともとずっと名寄・士別。ちょっとしたもの
・経営者とのかかわり結構あった
・夏はお菓子を買っていたから１日おき、冬は週に２回に利用していた
・週に２回。高い、品揃え悪い
・バスに乗るようになったら本数増やしてほしい
・士別にあるような店が欲しい。多寄で間に合うような店
・月に 1～2 回
・肉魚、きのこなど
・多少は高くなる
・農協に行くついでにちょっとしたものを買っていた
・頻繁に利用。コーヒーやお菓子
・利用は時々していた。値段が高かったたが、復活してくれると嬉しい
・それなりに行った
・日曜の夜に買い物
・お店の人との交流があった
・A コープ以外使っていなかった
・なくなるまで週に 2～3 回利用していた
・多寄で買えるものは買っていた
・店が欲しいし、できたらまた利用する
・ないと不便だけど、品数が少なく使ってはいなかった
・ちょっとした買い物をするときに不便
・店があれば利用するだろうし、通りすがりの多寄以外の人も利用する
・お菓子屋パン、飲み物を買うために利用していた
・品物を言えば A コープが配達をしてくれていた
・店があれば高くても買いに行く
・9:30 開店。その時間に出面さんが休憩入る。開店遅い
・値段が良くない。おやつ、調味料など。用事のついでで週１回もいかない
・週に１回くらい、ちょっとした物を買う時や忙しい時間帯に利用していた
・お店ができたら利用するが安いと嬉しい
・利用はそんなにしていなかった、月に 1，2 回
・調味料やアイスなど
・A コープで全部買えないから利用していなかった
・年に数回、野菜の種などを買っていた
・値段が高かったため生活のため安い士別に行っていた
・正直なくなってもそこまで困っていない
・間に合わせにちょこっとしたもの　生鮮、農作業用手袋、洗剤、トイレットペーパー
・士別がメイン
・農繁期におやつ買ったり

・利用はしていなかった
・盆踊りやひな祭りの景品で使うお菓子、農協の総会の景品や消防団の懇親会の食べ物を頼んでいた
・A コープは日持ちするものしかないから生鮮食品は士別やトドックを利用していた
・2 週に 1 回利用していた
・大体はほかの用事のついでなどで士別を利用していた
・近くに店があると緊急時に利用することができる
・週に 2 回、近いから足りないものを買い足していた
・生活用品は士別、食材は配達を利用していた
・高いけど近くにある A コープがよかった
・Q マートサイズの店が欲しい、大きくてもいいが続かないと思う
・A コープは多少利用していた。品数の少なさ、値段の高さで利用回数は少なかった
・スーパーや店ができることを希望。復活してもらいたい
・ちょっとした食材を買っていた
・主に士別を利用していた
・普通のスーパーが欲しい、足りないものを買いたい
・ちょっとしたもの　農協や用事があったとき、来客時に買う程度
・高かった。士別で 200 円のものが 300 円はした
・用事のついでにジンギスカン、飲み物、お菓子、たばこを買っていた
・品数が少なく、値段もコンビニ並みに高かった
・距離の差も少ないため士別に行っていた
・そこまで利用していない
・ジンギスカンなどを頼んでいた
・ちょっとしたものが買えるコンビニが欲しい
・ちょっとしたものや醸造庫で作った味噌を買ってきた
・母に会うついでに士別で買うが、足りないものがあった時など A コープを利用していた
・多寄に店ができれば利用したい
・利用頻度：多くはない。購入品：間に合わせ(アイス・お菓子)
・値段や品ぞろえ：値段が高く品ぞろえもスーパーには劣る
・復活してほしい。あったら地域のためにも利用したい。値段がもう少し低くなればもっと利用したい
・自宅近くにバス停ができて、市内のスーパーまで行けるようにしてほしい。移動販売にも興味あり
・利用していたが、値段が高いため、あまり利用しなかった。町のイベントなどでは利用していた
・店の人との交流は特になし。A コープはなくなったら困るとは考えていた
・週に 1 回程度
・足りないものやちょっとしたものを購入
・行きやすく、店主との付き合い長かった
・経営者の人間性が良かった。大きな魚をさばいてもらっていた。いてくれるだけでありがたかった
・店ができれば、またなくなるのは困るので、できるだけ利用したい
・あまり使ってない。夏はアイス、ビール、飲み物
・士別は品揃え良い、店もいろいろ
・コープじゃなくても小さくても店は欲しい
・歩いて行っていた
・A コープは菓子やパンを購入していた
・生鮮食品は士別市内でまとめ買いして冷凍
・農家が多い。同居していたら買い物にも行きやすい。A コープ⇔日向温泉の宿泊客
・たまたまなくなったものを買いに行く程度。品数も不満。店がなくて困っている話は聞かない
・自分で買うというのが大切
・士別より少し値段は高かったが、よく利用していた
・難しいとは思うが、またできれば嬉しい
・たびたび利用。週に一回ほど。野菜、生鮮食品など。ちょこちょこと
・5 年いたうちで 2,3 回
・士別メインで買い物している
・二日に一回行っていた。品数は少ない。食料品や日用品を買っていた
・昭和 30 年前半は 4000 人くらいいてかなり栄えていた
・合併前は店もたくさんあった
・月に 1 回あるかないか
・クリーニング店を利用したり、腐らないもの（カップ麺、パン、お菓子など）
・品数が少ないため利用頻度は低い
・利用は月に 1 回程度
・A コープでは食材がそろわないため、ジンギスカンやパンを買う程度

・利用頻度：週 2 回　購入品：タバコ、ちょっとした足りないもの、A コープの商品券（パークゴルフの品）、100 円くらいの小物、ジンギスカン、樽生ビール 10ℓ、値段：少し高い
・買い物の二割ぐらい利用
・月に 4，5 回
・ちょっとした野菜などを購入していた
・値段が高い
・週に総菜の日があり、自分の足で行けたため週に 2 回ほど利用していた
・欲しいものがすぐに手に入らないため、店や移動販売があると有難い
・コンビニでもいい
・多寄で買い物できる環境が欲しい
・それなりに利用している
・大量に買い物する時は士別まで行っていた。その理由：A コープの値段が高いから
・高いため、めったに行っていなかった
・長く住んでいるが、士別のスーパーのほうを利用
・品揃えが悪いため利用いていなかった
・風連で仕事をしているからそこで買っている
・士別にも週に 1,2 回
・妊娠中に週に 1 回利用していた、まとめ買いは士別で行っていた
・A コープは不便
・時々利用していた
・調味料、供え物、菓子、ラップを購入していた
・よく利用していたため、復活してくれると嬉しい
・値段は少し高く、品ぞろえは少し悪かったが、特に問題はなかった
・農協から個人に変わったとき、品ぞろえや品質が悪くなり、値段も高くなった。
・16 年ほど前は利用することが多かった。経営が変わって以降は、ポイント毎に利用
・週 3 回、総菜などちょっとしたものを買っていた
・あまり利用しなかった
・交通費を差し引いても士別に行くほうが安い
・2L の飲料が 100 円くらい高いし、倍ぐらいするものもあった
・週 3，4 回、A コープなくなったら困るから利用していた。日用品や食料
・飲み物、アイス、お菓子を買っていた
・設備が古く、消費税変更による機械トラブルもあった
・A コープは利用していた
・なくなったため、近くで買い物をする場がなくなった
・生ものが売ってないため、近くの大型店に行っていた
・醤油や砂糖もついでに買っていた
・飲み屋も 1 つしかない
・それなりで不自由ではない
・町内にないと困る
・値段や品揃えから考えて、ガソリン代をかけても他の所に買い物に行こうと思ってしまう
・週 3 回ぐらい、日用品を買っていた
・妻が運転できないので利用していた
・今は不便さを感じていない
・ちょっとしたもの（おやつ・花・焼酎）
・高いわけではない。生鮮食品あまりない
・利用していた（週に 3~4）
・日用品はほとんどコープ。肉や魚も。なくなって不便に感じている
・生ものを買う機会が少なくなった
・士別は品数多く安い
・なくなったら困ると思い結構利用していた
・春頃に野菜の種を買う程度　日用品等は士別で
・店があっても車で他へ買いに行く
・よく使っていた
・日用品や肉、魚などの食料品
・次にまたできれば買い物先の中心として利用したい
・品物の種類が少ない　無くなった日用品、総菜を買ってた
・A コープができた当初（30 年ほど前）は、利用頻度が高かった
・士別市内や名寄に大きなスーパーができるようになってから、そちらに行くようになった
・個人経営に移って、品ぞろえの低下や値段の高騰に伴い、利用頻度が減っていった

・復活すれば利用したい気持ちはあるが、ほかのスーパーにはない魅力(値段・商品入れ替え)がないと
・食料品などを買っていた
・健康のことを考えて歩いていた
・A コープは全体的に高かった
・より安くて新鮮な士別市内でまとめ買いをしていたのであまり利用しなかった
・不満はないが、またできても利用はしないと思う
・個人商店だからこそ買いにくかった
・利用頻度は低い
・高いため、頻度は少ない
・年に 10 回程度の葬式の仕出しやオードブルを頼んでいた（自治会でお願いしていた）
・週に 1 回程度利用していた
・肉、魚、電池など様々なものが置いてあるのなら利用したい
・老人クラブで、A コープの跡地でおしゃべり場を作るという話が出ているらしい
・そんなに利用していなかったが、義母がよく利用していた
・味噌、菓子、魚の料理、野菜、電池などを買っていた
・品揃えが悪くなり、高かった印象
・値段高い　週一回
・食品、日用品、飲み物、町には店が欲しい
・食料品や嗜好品
・経営が個人になってからは値段が高い
・急ぎの時など、ないと不便
・ほとんど使わなかった
・品揃えが悪い、冷凍ものばかり
・週 1、2 回
・大きな買い物は士別、こまごましたものは A コープ
・食品（3 日に 1 回)、日用品、除雪用の資材を買っている
・2 割くらい利用していて、ちょっとしたものを買っていた
・お店の人とは顔見知りのようなもの
・A コープは値段が高かったため行かなくなる
・行政が補助をして地域住民も利用できるものが欲しい

4. 多寄での生活の満足度について

本設問の回答を表 7 に示す。また、本設問の回答から推測されることは以下の通りである。

(1)生活満足度は概ね高い。
(2)人間関係や近所づきあいは苦にしていない(ただし、回答しなかった人々のことも慎重に調査したい)
(3)趣味・サークル活動は盛んな印象がある
(4)ここに住み、ここで生きるという覚悟が感じられる
(5)つながりたいけどちょっと億劫だとする声もある
(6)イベントの衰退を懸念する声が多いが、担い手となることは難しい
(7)多寄の未来を期待し、信じている人は依然として多い
(8)若い世代にとっては楽しみがないと考えている住民が一定数いる

表 7　多寄での生活の満足度について

・ない
・行事はあるが、体の関係で行けていない
・どうにかやっている
・デイサービスが楽しみになっている
・町内のイベントには、行くのが面倒になって行っていない。(自転車に乗れないため)
・今年はイベントの中止ばかりでさみしい(コロナの影響)
・静かで住みやすいから気にいっている
・室内外のパークゴルフ、お友達との交流楽しみ。多寄に来たのは 11 年前
・車も少なく、静か。娘が平日毎日電話くれる。月 1 くらいで孫と来訪
・昔はパークゴルフ　現在は外に出歩くことはできないため、楽しみは特になし
・足腰が悪い。ずっと暮らしているからそれなりに満足
・カラオケ（老人クラブ）
・夫は年中パークゴルフをしている
・農家同士の関係があって楽しい
・秋には多寄で市を開いて仲間同士で野菜を売っている(今年はコロナの影響で開催していない)
・満足している
・慣れた土地なのがいい
・片方が動けなくなったら子供が戻ってくると言っている
・老人クラブで時々ゲームに参加している
・好きな人は頻繁に集まっているけど、自分はそこまで参加していない
・このままでいい、ぎりぎり満足している
・持ち家だから逃げられないが、借家だったらわからない
・出て行ったとしても行く場所がない
・それなり。田舎なりに満足
・バイクやスキー。田舎は専門店がないから不便
・満足はしている
・住み慣れた場所での生活がいい
・近所づきあいもよく、士別に娘もいる
・産業も災害もなく住めばいいところ
・雪はね一つでも気を使うから都会は嫌
・年に 1,2 回会合をしている
・60～70%は満足できている。買い物の不自由がマイナスポイント
・地域の祭りや、ミニバレー・パークゴルフなどを楽しみにしている
・自然があり人間関係も悪くないが、男の人が交流する場が少ない、パークゴルフが主な交流
・女の人は週に 1 回金曜日にカトレア会で手芸や料理をして交流している
・ずっと住んでいて特に不自由はない

・仕事が忙しい
・店があればいい
・70%ぐらい
・手芸、カラオケが趣味
・車があるからいい
・バスも電車も使いにくい
・カラオケは冬によく利用し、クラブは月に 3 回行く
・80%、老人クラブや九十九大学に友人の車で行っている
・猫との生活が楽しい
・ずっと多寄にいたため慣れている
・車での外出が楽しい
・満足。喫茶店が欲しい
・農作業が忙しくて家のことをやりたいので、パークゴルフなどもいかない
・心も充実しており、楽しい
・町おこしメンバーの一員である
・静かでいい。人との付き合いも楽
・不満はない
・旅行などに行くグループも存在する
・普通
・お店がなく、士別の病院は午前しかやっていないから困る
・目で見て触って買い物を楽しみたい
・元気なうちはここにいたい
・一緒に旅行に行く友人もいる
・75 を過ぎたら送迎バスを使うが、欲しいのは店、コンビニ
・38 年多寄に住んでいる。名寄と士別の距離が近い
・役員が面倒なので集まりにはいかない
・編み物や手芸を夏は忙しいので冬に作っている
・なんでもいいから店があると嬉しい
・移動販売は経済的な面からも考えると、移り住む方を選ぶ
・移り住んだらサービスも店も使わなくなる
・50%くらい
・不満はない
・これ以上ないができるかもわからないし、今まで通りでいい
・楽しみはないけど生活しやすい
・住み慣れているし、知っている人が多いから満足している
・ない
・近所づきあいが豊富で不自由はない
・何か楽しいことがないか日々探している
・学校がなくなってしまった
・満足している。ゴルフをやっていて、楽しみもある好きな街
・交流会、クラブに入ってるから人との交流があって楽しい
・仕事はうまく行っているし、満足している
・程よい田舎で毎日平凡で平和で満足
・健康だからこそ生活できている
・今はまだいいけど、今後一気に満足度が下がりそう
・特に問題はなく、不満もないが周囲になにもないのはさみしい
・車があるからそこまで不便はしていない
・楽しみ特になし
・30%。不便が大きい
・友人の家に遊びに行くこと
・外食をすること
・満足。住みやすい
・自然がいっぱい
・優しい人が多い
・不便はしていない
・週に 1 回卓球をしている
・夜の買い物は不便
・70 点くらい
・雪は多いが住みやすい町で、生活は良い

・人と人とのつながりがありみんないい人
・交通網が悪く、生活において不便
・小さいから人と人のつながりが強い
・交通は不便だが嫌ではない
・子供が名寄の高校に通っているため、毎朝駅まで送っている
・時間にしばられなく、悪いところはない
・研修生として昔は子供を受け入れていたが、最近は大人が多い
・100%。45 年くらい住んでいる
・編み物やテレビが楽しい
・満足している
・楽しみ：ひまわり会。夫のいない人たちで集まってご飯 4 か月に 1 回。部落内で月に 1 回お楽しみ会
・年取ってあまりでなくなった
・兄弟が近くにいる。旅行もいく。満足している
・車で出られる。特に不満はない
・趣味や仕事に対する充実感あり。80 点くらい
・いい町ではある。店がないのがさみしい。店があったらもっと住みやすい
・子どももいないしさみしい
・若い人から見てたら充実してないよね
・野菜は自給自足。自分で作るもののほうがおいしい
・釣り、庭木いじり、山歩き。畑忙しい。毎日温泉
・満足度は 90%
・医療費がただで介護も充実している
・住みやすい町で充実している
・つながりがあるから安心して暮らせる
・今はネットがあるからビデオが観られるし買い物もできる
・すぐに物（お菓子など）を買えないのが不便だが、田舎ならではの良さがある
・ザリガニ採って料理
・山や川に行く。夏はパークゴルフ
・贅沢は出来ないが普通に充実
・生活に不便はない
・病院や買い物は旭川に行く
・父は歌の会に参加
・ずっと多寄。満足している。札幌・旭川までもアクセスいい
・冬はスキー・お酒（ビール好き。なんでも飲む）
・楽しい
・夏に野菜や花の苗を売り、冬は手芸品を売っている
・ほとんど満足している。（買い物以外）
・ゴルフをしていて仲間もたくさんいる
・花の世話
・冬は家で編み物をしている
・静かでいいところ
・ずっと多寄に住んでいる
・孫のために家庭菜園や手芸をしている
・店がないだけだから不便は感じない
・車があれば大丈夫
・特に大きく困ったことはないため、それなりに満足できている
・慣れたから普通
・不便はない
・それなりに楽しんでいる
・近所との付き合いがあって楽しい
・満足している
・住めば都
・空気もよく何もないがいいところ
・パークゴルフなどの活動はしていないが楽しい
・やることがなくやりたいこともない
・50%の満足度
・楽しみを作っていきたい
・車があるから何とかなる。昔からいるため
・70%くらい

・満足はしている
・周囲にいる友達と話したりお茶したりしている
・パークゴルフ
・気が楽
・春から秋までパークゴルフをしている
・住みやすい。災害などもあまりない
・満足している
・もし嫌であれば他の地域から通う
・まあまあ満足している
・団体行動が好きではない
・自分一人で体を動かせる場所がほしい
・さみしいような、不安なような気持がある
・100%
・楽しみは特になし
・ある程度は充実している
・大きな楽しみがない
・1つは店が欲しい。除雪と買い物が大変。満足度は50%
・昔はもっと暮らしやすかった（年金や値上がりなど）
・80%くらい、車がある間はそこまで不便がない
・野菜作りや温泉、部落の集まり、バイクをしている
・光回線が道路一本違いで来ていない
・もっと苦しい地域もあるからまだまし
・農業もやっていて充実しているから満足している
・自然もあり、いいところ
・バスや交通網が発達すると有難い
・普段は満足しているが、体調が悪い時などは不便に感じる
・車が使えてこその楽しみが多い
・生活にはとても満足している。静かで人も悪くない。干渉しすぎない関係
・パークゴルフに興味があるが、仕事もあるため、行きづらい
・健康なら楽しいと思う。気軽に買い物できることも満足度に影響する
・今は買い物ができるから不満はない
・満足している。何も言うことはない。住み続けたい。良いところである
・病院に行くのが問題
・70～80%。困ったことはとくにはない
・孫と犬との暮らし・畑づくりの生活が楽しい
・満足している
・多寄の人との交流はあまりない
・80%くらい。クラブに参加している。いいところもある
・ホクレンのスタンドの光があるととてもいい。なくなってほしくない
・月・木でデイサービスに通っており、特に問題もない
・周りの人との付き合い　平成12年引っ越してきた（以前から多寄には住んでいた）
・老人クラブ、デイサービス、カラオケなどで笑うことが楽しみ
・人や自然がいい、100%満足している
・災害も少ない
・畑で野菜を作って自分で食べること
・もともと多寄で士別の後多寄に戻ってきた
・満足度は100%に近い。暮らしやすいし関係もいい
・不便なところはあるけどバスなどもあるし
・主婦のため、暇つぶしにTVや新聞を見ている
・息子が札幌にいるため、これからのことはまだぼんやりしている
・120%満足している
・静かでいい、名寄は窮屈
・楽しみ：釣りをする（年に10回くらい猿払まで）
・地域とのつながりで住みやすい
・足が不自由になってしまったので、買い物が今一番楽しみになっている
・子供の声を聴きたい
・学生が動く前に市長や議員が市民のために活動すべき
・助け合いがあるのは嬉しいけど歳を取って引っ張る人がいなくなってきた。街に活気が欲しい
・畑で野菜作り・町のイベントやお祭りを見ることが好き

・不自由なく、老人クラブが楽しみ
・特に何も感じない
・楽しみや趣味もない
・カラオケ仲間で遊ぶなど楽しみがあり、満足した生活を送れているため、困っていることはない
・環境は静かでいい。病院もある。近所もいい人→80%。しかし、買い物を考えると不安
・老人クラブ、何年も続かないもの、車がなくなったら変わるのではないか
・住みやすい街なので、多寄で生活し続けたい
・1 人で住むのが楽しい。孫が来るのが楽しみ。野菜も作っている
・自分の家が一番いい
・満足はしている
・雪が多いので運転が不安
・満足度 80%
・陶芸やパークゴルフなどいろいろな活動に参加している
・自分が積極的になりさえすれば多寄はいろいろできる
・住みやすいけど、店がないのがつらい
・人間関係も良い
・不満はなく、90%満足している
・すべてが近く不自由はない
・農家の奥さんが中心になっているサークル（手芸やお話）に週に 1 回行っている
・蕎麦打ちの会がある
・若い人たちで雪まつりや収穫祭を行っているが祭りでは出店が少なくなった
・満足している。税金高いけど。人とのつながりもある
・スキー・そば打ち・パークゴルフ・スキーを子どもたちに教える
・住めば都、何もないからいい
・周囲の人たちとも仲がいい
・ここに家があるから生活している
・習い事をしたいと思うが、市内に行くしかないのでなかなか始められない
・特に楽しみはないが不満もない
・昔は仕事をしていたので楽しかった
・電車もバスもあるので便利だと思う
・100%。大体の店が近くにあるのでとても便利。病院も徒歩 15 分のところ
・楽しみ：夫婦で社交ダンス。40 代から始めている。週に 1 回市内まで
・今が満足している
・家の生活は問題なし、近所の子供の声を聞くことが楽しみ
・趣味は特になし
・畑が忙しく、特にできることがない
・生まれも育ちも多寄なので自分に合っている
・ピヤシリへスキー毎日
・運転が好き
・70～80%満足している。2 歳ごろに多寄にきて 70 年以上住んでいることもあり、暮らしやすい
・楽しみ：夏はゴルフ、冬はクロスカントリースキーとカラオケ（市内に行く）など
・俳句のグループに 2 つ、老人クラブにも参加している
・最高に満足している
・つながり、助け合い、楽しく、仲良くやっている
・生活が単調になる　住みやすくはない
・これからも多寄で暮らす
・料理が好き　良いもの、安いものを探して自分で調理する
・多寄の町おこしにやりがいを感じている様子
・子供もいなく、何もない哀れな町
・幸せといえば幸せ
・コンビニとバスが欲しい
・体操と月 1 回のボランティアをしている
・士別や名寄に行くのも不便
・60%。雪とけたらソフトボール。町内クラブ参加（夏に 5 試合）
・充実はしている
・野菜はほとんど自給自足
・同級生と旅行、飲みなど
・昔農家をやっていたので、畑づくりが楽しい
・農業は冬が暇になる

・満足ではないけど、歳だから
・85 点（お店がないため 15 点減点）
・さっぱりしていて面倒でないためストレスがたまらない
・パークゴルフやそば打ちなどを行っている
・みんな知り合いで満足している
・釣りやパークゴルフをしている

5. まちづくりに関して若い世代や大学生に期待することについて

本設問の回答を表 8 に示す。また、本設問の回答から推測されることは以下の通りである。

(1)多寄の若い人も頑張っていると思うと考えている住民が多い
(2)農業への従事や後継者としての若い世代を期待している
(3)住民同士の助け合いで買い物に行ける仕組みをつくってほしい
(4)ちょっと雑談するような場所がほしい
(5)地域内の人たちのまちづくりへの温度差を感じる(自分は何もしたくない、できない)
(6)特別なことをせず、普通に交流すればよい
(7)ただ若い人が暮らしてくれていればいい
(8)若い世代が住むメリットが何もない
(9)アパートをつくったり、空き家を活用した若い世代の士別からの移住

表 8　まちづくりに関して若い世代や大学生に期待すること

・どうにもならないのでは？
・農業を頑張ってほしい
・若い人が頑張って店の一軒でもいいから経営できるようにしてほしい
・高齢者を助けてほしい
・若い人たちから見たらつまらない町だと思う
・野菜の直売所などが週に１回でも欲しい
・送迎サービスを強く希望。通院や買い物に自分で行って選びたい。現在は友人に頼んでいる
・出歩けないため店ができてもいけない・宅配サービスのほうが良い
・若い人たちと交流がないからよく分からないが、頼りないんじゃないかと思う
・盛り上がってほしい
・おじさん方がなんとかしようと活動しているので、それに負けないぐらい盛り上がってほしい
・大学生は多寄に住めないしどうしようもない
・特に期待はしていない
・士別で働くこと
・若い人にたくさんいてほしい
・交通のサービスよりは店が欲しい
・学校など子供の生活の場が欲しい
・農業の後継ぎがいないため、農家が無くならないか不安
・若い人と話す機会がないため、サークルの人たちの話を聞いてほしい
・養護老人ホームやコンビニを作ってほしい
・『多寄で市』に来てほしい。たくさん交流してほしい
・若い人が街の伝統行事に主体的に参加しなくなっている
・町の伝統を引き継いでいってほしい
・店が欲しい
・特にない
・交流がないから若い人がよくわからない
・農家に若い人が増えているからいいと思う
・雪まつり、盆踊りを続けてほしい
・送り迎え
・活動に参加してほしい
・１人１人が楽しく、自信をもって行動してほしい
・空き家や離農者が多く、高齢化している社会であるため、地域を活気づけてほしい
・地域の元気な人が集めって暮らすことができるような場所があると、離農者が都会に行かずに(地域に残って)生活することができるのではないかと考える
・活性化
・人を増やして一緒に考えてほしい

・あまり考えてない。人は減っていくから期待もない
・イベントやってくれるのは助かる
・地域の行事に参加してほしい
・学校もなくなって若い人が住みにくくなってしまった
・盛り上げてほしい
・若い人が頑張っている
・地震があった時も助けてくれた
・ゴルフ場が立派なので積極的に利用してほしい。
・地域一体はそこまで望んでいない
・まだ自分はいろいろできるため、地域にお世話になりたいとは思っていない
・イベントは行っているが、人もいない形だけのイベントになっているのではないか
・人が少ないことによる変化をどう考えているか
・少ない若い人たちに負担がかかっておりかわいそう
・ない
・新しいことをやってるみたいなのでそのまま頑張ってほしい
・農業への参加
・特にない。頑張ってほしい
・特にない
・車やめたらバスのサービスを。先を考えると荷物を持って帰るのがつらい
・人口、若い人少ない→来てほしいが働く人が少ない。畑もなくなって寂れていく
・大してない。何か協力したいなあ。でも体も動かなくなってる
・若い人に負担かけたくない。
・当番制でお祭りやってるけど、人数少なくなってきてるからできないのではないか
・調査して、その結果を教えてほしい　自分たち（学生の意見）が参考になる
・学生が電話して、買いたいものを聞き取り、届けてほしい→西條でバイトとしてどうか
・移動販売は高いからいらない
・現在はそれぞれで頑張っているため年齢の幅広く、全体で町を盛り上げていきたい
・町を守ることを若い人たちに期待している
・行政に依存している、自分たちでなんとかできる世に自立していきたい
・一人で高齢者だと苦しい　自分の代わりにいろいろとやってくれる人が欲しい
・地域の人で協力、送り迎え
・コンビニが欲しい　自分で見て買いたい
・雪まつりの集い
・後継者
・大学生と意見交換がしたい
・若者が町にいれば元気になる
・飲み屋さんとかできたら。学生がバイトできたら皆行くのでは
・若い人が頑張ってくれていて、励みになっている。このまま頑張ってほしい
・若い人は若い人で大変だと思う
・あまり接点がないからわからない
・来てくれたら明るくなる
・たまにＵターンしてくる人がいる
・道外から研修で来る人も少しだがいる（士別市が多い）
・移動サービスなどの整備など、地域づくりへの貢献を頑張ってほしい
・難しいのでは
・価値観の違いを感じる
・何考えているかわからないけど親切にしてくれる
・アンケートなどの調査をしてくれるだけでもありがたい
・愛知から農業バイトが来ていた。大学でも農業バイトお願いしたい
・トドックのようなシステムの強化
・嫁いで多寄に住んでほしい
・一人でも多く介護人材を確保してほしい
・何かに頼ってしまうと結局変わらないため、過度な期待をせずみんなができることを少しずつ行っていくのが理想
・多寄のために何かするのではなく、自分たちがしたくて行ったことが結果として地域に恩恵を与えるようになればいい
・嫁に来て住んでほしい
・コンビニ的なものが欲しい。農協がコープを維持してほしかった
・送迎サービスよりも宅配や移動販売（時間に縛られたくない）

・農家をやる人を探してほしい。店を起こすのに市の助成を
・コンビニに以前あったクリーニングや宅配の機能がある店が欲しい
・雪はねや屋根の雪下ろしのバイトを頼みたい
・若い人もいろいろ考えているのが続いてほしい
・街中がさみしい
・雪まつりをやってくれていた
・もう少し活気が欲しい
・地域に若い人来て、引っ張ってほしい
・地域との交流も減ってきているので、その橋渡しをしてほしい
・若者のアイデアがあるのもいい
・若者が地元のものを加工して販売する小さな店があるといい
・若い人たちはよくやっていると感じている　集まりとかグループへの参加
・お互いに協力し、まとまりを作るトドックで足りないものを、乗り合いバスなどを利用して買い物したい
・若い人にはいてほしい
・スーパーまでの移動手段が欲しい
・市に頼らないで、自主的な行動を
・交通サービスが欲しい
・これからも運動続けたい
・多寄にも若い人がいたらいい
・お店を作ってほしい。ふらっと行けるのが良い
・孫、娘がみんな札幌に→1 人くらい多寄にいてほしかった
・若い人が考えていることをどんどんやってほしい
・これといった農作物がないため多寄ブランドができるといい
・自治会、年に 2 回しか集まらない。地神祭でみこしを担いでほしい
・にぎやかにしてほしい。農村広場の運動会とか。子どもから大人まで参加できるもの
・たまに訪問して一緒に話をしてほしい。
・若い人と年寄りにやさしく
・子どもを産んでほしい（多寄で）
・福祉サービス、医療の充実
・大学生とはかかわりがないから実感がわかない
・いろいろやってくれていることは知っている
・人口が減っているため、家など建てて多寄に住んでほしい
・多寄に住んでもらいたい
・大学生と高齢者が交流する機会を設けてほしい
・車の乗れなくなったときに、乗り合いのバスが欲しい
・農家をやってくれる人がいればよいが・・・
・店はあったほうが有難い
・食事会は人が集まらない
・現時点では特に期待することはない
・若い世代に引っ張って行ってほしい
・都会に出ていくのではなく、地域に残って盛り上げてほしい
・多寄からいなくならないでほしい
・そのためには働く場が欲しいのでは
・多寄に住んでほしいが働くところがない、農家も嫁もいない
・何かあれば教えてほしい
・若い人はいろいろやってくれているみたいだけど、人口が少ないから難しい
・若い人に住んでほしいような
・でも多寄の若い人も頑張っている
・マイクロバスの運転をしてもらい、希望者を募って買い物に連れて行ってほしい
・若い人が定着し、継続的な活動を行うこと
・農業
・農業、新しい人、生活の安定できる：語り合う時間
・コミュニケーション、働き手
・"若い人たちが住みやすいようにすれば来るのに
・ここに住むメリットを作ること
・生活環境の充実
・期待はしている
・離農していく人が多い

・あまりない
・多寄にいる若い人たちが祭りなどしてくれているが、なかなか行くことにならない
・若い人に頼るのもいいが、周囲の人が盛り上げる必要があるのでは？
・士別の話題がなく、表に出てくるものが欲しい
・若い人たちがイベントをやってくれる
・人口を増やさないといけないが、農業しかなく若い人が住みにくい
・車のない人は寄合のバスがあるとよいと思う
・地元の店→あれば使うかもしれないけど、バスのほうが良いと思う
・コンビニが欲しい
・学生と市が連携して買い物調査を行っていることが満足
・乗り合いバス、タクシーのほうが利用する可能性はある
・生活実態を知ってほしい。つながりが大切になってくると思う
・近所や隣人とつながることのできる社会を目指してほしい
・学校の跡地の利用法
・学校がないと子供が集まらない
・送迎バスがあるが、ついでに店に寄ってもらえると助かる
・多寄に店は欲しいが、利用されるかはわからない
・俳句に入ってほしい！なくなったらさみしいから
・人が少ない
・若い人が入りづらい→そのための場所を用意する必要がある
・アパートなどが必要
・複数人で送迎を頼む（謝礼として片道 1000 円くらい払う）
・乗合タクシーなど、送迎をメインとしたサービスを
・野菜を売るイベントを A コープでやってもらいたかった
・若い人との交流がないためよくわからない
・人付き合いが少ない
・サービスよりコンビニがいい
・人口増えてほしい。バス利用しない。だから店が欲しい。コンビニ（セイコーマート）野菜買える
・若い人材、労働力が欲しい
・コンビニが欲しい
・電子機器の使い方がわからないので教えてほしい
・交通サービスは事足りるし、増えても利用する人がいない
・今あるものを維持してほしい
・買い物の送迎バス
・病院に行くのが不便
・元気でいてほしい
・雪まつりをやっていたのを覚えている
・農家の後継者が多く大変だと感じる
・精一杯やってくれているから多くのことは言えない

Ⅳ 小括

先述の住民のインタビュー調査の結果、昨年度のアンケート調査の結果から、同地域のまちづくりの方向性は以下の 4 点にあると示唆された。今後は、以下の 4 点を中核にワークショップなどを企画し、住民参加の下に買い物環境の改善に取り組む所存である。

(1) 「買い物」という行動の共通理解
・「店の出店」への期待は大きいが可否をどのように見極めるか ・買い物は「買う」行動だけでなく「選ぶ」行動 ・店を維持できなかったことを“実績”と解釈して；情報の精査 ・地域全体の食費 1.6 億円で何をめざすか。どう買い支えるか ・「価格」「利便性」「品揃え」何を諦めるか
(2) 移動販売の実現
・「店の出店」への期待は大きいものの、店舗でも買い物の不便は解決しないケースがあると思われる ・移動販売の機動性の高さに期待 ・これにも“買い支え”が必要となる ・移動販売を中核に生活を維持するモデルの提示と補完方法の検討；簡易型出店の可能性
(3) 移動手段(バス)
・クルマ移動前提から切り替えられるか ・公共交通併用か買い物専用か ・従来の“バス停”方式では利用率増加は見込めず ・「利便性」の共通理解 ・体調を崩せばバス移動も成立しない場合あり
(4) コミュニティづくり
・つながりの再構築は必要；どのようなつながりをめざすのか ・官民協働のあり方；全員が必要とする主体でありつくる主体の関係性 ・外部に開かれたコミュニティ；ゆるくもテーマのあるコミュニティ ・「できるかできないか」から「したいことの可能性を探る」へ ・スローフードのあり方；顔の見える関係で安全な食べ物 ・NPO による運営もひとつの可能性

Ⅴ. 提言（アンケート調査、インタビュー調査を通じて）

1. 住民の皆様へ

これまでの調査への協力に深謝を申し上げる次第です。大変煩雑なアンケートにお答えいただき、さらには大学生のインタビュー調査にご対応いただき大変貴重な知見を得ることができました。ここでは、住民の皆様へのいくつかのご提言やお願いを申し上げます。

まず第 1 に、「なぜ買い物環境は現在の状況になったか」という議論を住民レベルで行う機会をつくっていただきたいということです。これまでの調査で、住民の皆様が買い物に困難や不安を抱えていることは明らかでした。現在の買い物という行動の持続可能性に関しても、数十年間は安泰ということにはならず、地理的にも自動車がなければそもそも生活は成立しないという声が多く聞かれ、ほどなくしていわゆる買い物弱者になる可能性や 10 年以上の長いスパンでの現在の生活の維持は難しいなどの危機感は十分に感じることができました。だからこそ、今あらためて店舗の必要性や移動販売の充実など具体的な施策の展開を求めていることを確信しています。このことを勘案した際に、かつて地域にあった店舗がなくなった現実を住民ひとりひとりが深く考え直すことが必要と思います。人口減少や高齢化による購買行動の縮小など時世の変化は大きいのですが、それでも、住民が住民の力を活用しながら、買い物環境を維持する努力はできなかったのかという議論が積極的かつ具体的に行われてほしいと感じています。

私たちは、2019 年度のアンケート調査の結果から、地域の食費や日用品の金額や交通費などが 1.6～1.9 億円くらいの位置にあることを試算しています。この先、店舗や移動販売などを企業が検討する際は、地域の人口をベースにマーケットを把握するものと思われますが、そこで住民が自らのマーケットの規模を把握し、例えば「このうち〇〇万円はここでの購買につなげられるはず」というようなメッセージを住民が発信していくことは大変説得力があると同時に、企業側と限りなく対等に議論ができる契機になるはずです。いわゆる「買い支え」のリアリティを実際に買い物をする当事者が伝えることに意味があります。地域の買い物環境をつくるのは、行政でも大学でもなく、住民自身であるという共通理解を徐々に構築していってほしいと願っています。もちろん、そのために必要なデータの収集や分析は大学の研究者として最大限のご協力をしていきたい所存です。危機的に困ってからではなく、今まだ地域の体力があるうちに様々なことに動き出した多寄地区は、同様の問題を抱える北海道各地が注目し、そして希望を見出す契機となるはずです。

第 2 に、「行政に頼らず、必要なものは住民の力でつくり出してほしい」ということです。これは行政と関係なく取り組むことを意味しているのではありません。むしろ、行政とはこれまで以上に深くて強い関係を築いていく必要があるのですが、わが国では、いわゆる“箱もの行政”をやめようという時勢にあって、「とりあえず何か建物をつくってから考えよう」

という思考はやめて、今必要なものをなるべくコストをかけず、コンパクトにつくり、行政が担うべきことと住民が担うべきことの役割分担を両者が誠実に対等に未来志向で議論できる関係を築いてほしいと思います。

「行政の責任」という言葉がよく聞かれます。住民がより長く、安心してそこに暮らし続けられるように支えることがその主たる論調と思われますが、私はそれを具現化する主体は、地域を愛し、地域をよく知り、地域で長く暮らしたいと考える住民ひとりひとりだと思います。そこに暮らすプロとして、住民がつくりたい未来を発信するという姿勢は、これからの時代に欠かせないスタンスです。

第3に、買い物環境を考える過程では、店や移動販売などに限らず、(公共)交通のあり方も含めて総合的に検討していく必要があり、多角的な視点を持っていただきたいと思います。すでに士別市役所が、乗合タクシーなどの実証実験を行っていますが、決して明るい見通しとは言えません。そもそも、自家用車利用を前提に生活が成り立っている方が多い地域にあって、ほんの数パーセントの方々のために交通を支えることが必要なのかという疑問もありそうですが、それに対しては、私たちは「必要」と考えています。住民の皆様にも、なぜ行政はコスト面で厳しいなか、買い物環境をつくろうとするのか、交通を再編しようとするのかを行政と一緒に考え、“未来への投資”の意味を共有していただきたいと思います。

これまでの調査で、食費や日用品に代表される“お金”の問題、買い物の不便の内容、店舗や移動販売などへの期待、店舗ができた場合の利用希望や、経費負担の可否など様々なことが明らかになってくると同時に、住民全員が一方向を向いているのではなく、多様な意見が存在することも見えてきました。議論は順調に進んでいるものと思われます。長く議論されてこなかったことが今日明日に解決するはずもありません。短期的見通しで判断するのではなく、ぜひ近くの人とこの話題を話し、その輪がどんどん広がっていくことを切に願う次第です。

2. 行政の皆様へ

先述のように、住民の皆様へは、「買い支えの必要性」をお知らせし、具体的な実現の可能性の議論を住民レベルで行うことをお願いしました。机上の空論と思われるかもしれませんが、どんなに時間がかかろうとも、住民が自ら答えを出し、進んだ一歩に重みがあると思いますし、行政として、住民に関わるスタンスをより未来志向で建設的なものにブラッシュアップしていく必要性は明白と思います。

北海道の多くの自治体が財政の健全化に取り組むなかで、どこの自治体も買い物環境の改善にコストをかけられない現状は明白です。そうなりますと、住民の努力によって環境を整えていくよりほかに策がない感がありますが、本来はそのあり方が正しいのかもしれません。今、多寄の住民の皆様は、買い物環境について困難を抱え、不便を感じながら、改善に向けて動き出しています。それを行政としてどのように支えていくのかを、従前の“中立”

のようなスタンスを超えて議論を深めるべきと考えています。

全国的な事例を見ますと、民間事業者への補助金の支出や住民組織への車両や店舗づくりへの助成などはもちろんですが、若年者の雇用創出の一環としてのプロジェクトづくり、社会福祉協議会や地域包括支援センターなどとの協働など、セクションを超えた事例が散見されます。買い物環境のためだけの施策ではなく、コミュニティ醸成をも視野に入れた総合的でダイナミックな発想を住民は期待しているものと思われます。

住民の努力を行政はどのような形で支え、称えるのかということが改めて問われる時代となりました。コストを負担できないのならば、当該地域の住民の生活コストの低減を未来に向かって構築する必要があります。

公平性や中立性が求められることは承知していますが、住民は「買い支え」の視点から、事業者は仮に不採算が見込まれても、その企業努力と「社会的責任」の視点から奮起している現状のなか、行政はどこからいくのか、これまで領域を問わず施策を展開してきた経験と知見から可能性は無限と思います。新たな「公」のありようの議論が進むことを切に願う次第です。少なくとも、今後住民が「買い支え」の議論に取り組む際には、意見の相違や対立が起こることも危惧されます。その時、その相違や対立には意味があるということを伝え続けることは最初で最大の役割になることは間違いありません。

さらには、「買い支え」については、前述のとおりですが、一方で地域住民からは、早期に実施できる具体的な環境改善が求められていることも事実です。殊に、買い物環境を検討する上では、店舗へのアクセス、すなわち、(公共)交通施策の改善もまた必須事項です。

本報告書では触れませんが、すでに実施している実証実験等の結果から多角的に調整をしていくことが求められることは明白です。

住民の皆様へのインタビュー調査の結果からも明らかなように、現状では多くの方々は自家用車利用を前提とした生活をしており、さらには、公共交通の不便さがそこに拍車をかけています。しかしながら、住民の皆さんの高齢化を慮れば、自家用車利用の持続可能性を確保していくことは難しく、不便と言われる現行の定時定路線のバス方式の見直しはもとより、近い将来を見据えた新たな移動手段の構築は、買い物環境の利便性向上のみならず、運転免許証を自主返納した方をはじめ、高齢者が自家用車に依存することなく、生まれ育った地域で安心して生活を続けていくための環境づくりとしても有効であり、行政が地域住民、事業者と連携して進めていかなければなりません。

Ⅵ「買い支え」を再考する

本報告書の最後に、「買い支え」について述べることといたします。

この報告書を書いている最中に、同地区に待望の商店「ミニショップヤマモト」がオープンしました。同地域では、実に 3 年ぶりの店舗であるとのことで、住民の皆さんは大いに喜ばれているものと思います。

私たちは、これまで住民の皆さんの買い物行動や食費等の概況、また、買い物環境に臨むことを調査する中で、かつて同地区にあったＡコープについての話題がよく上がりました。そこでは、「もっと買い物に行っていれば閉店することはなかったのに」という後悔の念もよく聞かれました。

今あらためて考えたいことは、商店の維持は、経営者や従業員の皆さんだけではなく、少なくとも、この地域では、住民の協力が不可欠であり、そのための「買い支え」を実施していく必要があります。

識者の見解では、買い物環境改善のアプローチは以下のように概ね 5 つほどあると考えられます。

①流通からのアプローチ	共同購入 移動販売 ネットスーパー 御用聞き 買い物代行　など
②交通からのアプローチ	買い物バス
③来店者の自宅への配達	購入商品の配達 タクシーの活用 宅配業者による委託
④小売業者からの「歩み寄り」	小規模＝小商圏店舗の出店 中山間地域への出店
⑤消費者からの「歩み寄り」	共同店 共食

黒川智紀：『過疎地域の買い物弱者対策における採算性及び継続研究』(PPP 研究センター紀要．5,2015)より一部変更して引用.

さらに、それぞれ以下のようなメリット・デメリットが考えられます。

	メリット	デメリット
①流通からのアプローチ	・商品宅配、ネットスーパー等は、過疎地域の「買い物弱者」対策の有効な手段となり得る。 ・移動販売方式では、「商品を実	・過疎地域は配達頻度が少なくなる傾向がある（採算上、宅配エリアの広さと配送頻度はトレードオフが発生する）。

	際に見て選ぶ」という買物のメリットを享受できる。 ・移動販売方式は、店舗を開設するよりも安価なコストで実施できる。 ・配達員が高齢者の状況を把握することができる（広い意味での「見守り」）	・利用者が配送料を負担(但し、消費者から配送料負担の理解を得ることは難しい)。 ・商品宅配、ネットスーパーは、注文、商出荷、配送等のシステム構築が必要。 ・移動販売は人件費、車両費用、燃料費等の費用が負担となり、黒字化が難しい。 ・ネットスーパーは PC やネット環境が必要で、高齢者にとっては発注操作が難しい。
②交通からのアプローチ	・交通の足を提供する方式であるため、買い物のみならず、病院等の他の施設への移動も容易にすることができる。 ・必要に応じて運行するデマンド方式は利便性が高く、効率的である。 ・取り組み費用の負担について、「運賃」という形で理解を得やすい。	・交通手段の提供は、運行車両の台数や運行方法によってはコストが大きくなる。 ・定期便方式の場合、乗車率が低いと非効率で赤字になりやすい。 ・デマンド方式は、配車の依頼を受ける事務所やシステム開発への投資が必要になる。
③来店者の自宅への配達	・徒歩や公共交通で買い物に来る高齢者の購入荷物の運搬負担を軽減できる。	・手数料収入が少ないため、採算面で黒字化が難しい。
④小売業者からの「歩み寄り」 ⑤消費者からの「歩み寄り」	・「近所で買物をする」という、最も理想的な「買い物弱者」対策となる。 ・商品を実際に見て選ぶことができる。 ・買い物の場ができることで、地域に根付いた「コミュニティの場」を提供することができる。	・過疎地域では採算性の確保が困難。 ・店舗の事業開始までの手続きが煩雑。 ・店舗の開設コストが必要(店舗開設・什器費用)。固定費が大きい(人件費・賃料等)。 ・生鮮食料品の場合は、在庫ロスが発生する可能性がある。

黒川智紀：『過疎地域の買い物弱者対策における採算性及び継続研究』(PPP 研究センター紀要．5,2015)より一部変更して引用.

以上の表を概観しても、買い物環境を維持・創出することがいかに難しいかがわかります。

先述の表の作者でもある黒川智紀氏は、従来、「買い物弱者対策」に関するサービスが経済的に成立しないと見られていた過疎地域においても、PPP 等の手法を活用すれば、「採算性」「継続性」が向上し、一定の条件下においてサービスが成り立つ領域があるとしています。

公民が連携して公共サービスの提供を行うスキームを PPP（パブリック・プライベート・パートナーシップ：公民連携）と呼ぶのが一般的です。PPP の中には、PFI、指定管理者制度、市場化テスト、公設民営（DBO）方式、さらに包括的民間委託、自治体業務のアウトソーシング等も含まれます。PFI（プライベイト・ファイナンス・イニシアティブ）とは、公共施設等の設計、建設、維持管理及び運営に、民間の資金とノウハウを活用し、公共サービスの提供を民間主導で行うことで、効率的かつ効果的な公共サービスの提供を図るという考え方です。また、黒川氏は、以下の種々の事例を示し、その可能性を検討しています。

【PPP による固定費削減事例】

■人件費の削減事例

・ボランティアの活用……「ノーソンくらぶ」（大分）は、元農協支所職員が半ばボランティアで運営している。「古市ひろば」（長門市）は、地区住民がボランティアで運営。

・シルバー人材の活用……商品の宅配に地域のシルバー人材を活用。

・人件費の埋没コスト化……「桑田の庄」（広島）は、本業である農業法人の事務所に店舗を併設し、事務員が店舗運営を行うことで、店舗運営の人件費を無いものとしている。

■店舗の取得コストの削減事例

・既存店舗の居抜き出店……「ノーソンくらぶ」（大分）は、元 A コープの居抜き施設を活用。「青研」（熊本県荒尾市）は、空き店舗を安く借りて出店。

・既存施設の活用……「桑田の庄」（広島）は農業法人の事務所兼倉庫を店舗に改装。

・建物・土地の譲渡……「万屋」「油屋」（広島）は撤退した JA から店舗や給油所を譲り受けた。

■設備・什器・内装費用の削減事例

・DIY による内装…ノーソンくらぶ」(大分)は、什器や内装を DIY で作成。

・リサイクル……「青研」（荒尾市）は設備を中古品で揃え、初期投資を抑制。

・バザーの活用……「古市ひろば」（山口県）は、地区住民の持ち寄ったバザーの収益を活用。

【地域との連携による売り上げ増加事例】

■地域の買い支えによる売り上げ増加事例

・買い支え……地域住民が店舗での買物を増やしたり、地域の行事の際に優先的に購買する等。

・地域コミュニティによるプロモーション……JA 広島ゆたか（広島）は、地域住民が季節商品等のプロモーションに協力して、売り上げが向上した。

・地元生産組合との連携……ふれあいプラザ須金（山口）は、地元のぶどう・梨生産組合と連携し、秋季におけるぶどう・梨の直売や出荷作業を積極的に受託することにより、売り上げを確保。

・地域外への販売……「ノーソンくらぶ」（大分）は、地域の農協や農家と連携しながら農作物流通にも関与。会員が生産した農作物を地域外のスーパーで委託販売し、年間 461 万円（2009 年度）の収益を確保している。

■地域との連携による営業外収益の確保

・地域住民からの出資による店舗維持……大分県「ノーソンくらぶ」は、会員（80 名）が入会金 2,000 円、年会費 1,000 円を出資している。

・地元企業からの広告等……買い物弱者支援のコミュニティバス（広島）は、運賃収入の他、住民からの賛助金、地元企業の車内広告費、行政からの助成金等を得て事業を継続している。

・地域・行政との連携……過疎地域における移動販売ハッピーライナー（高知）は、地域の高齢者の見守り機能を担う協定を結び、県から補助金を得ている。

【地域との連携、多機能化・共同化による仕入れコスト削減事例】

■地域との連携による仕入れコストの削減事例

・地元産地からの調達……北海道の過疎地向けコンビニ「セイコーマート」は、地元の産地から仕入れ、全道に広がるネットワークを通じて配送することでコストを削減。

・地域コミュニティからの仕入れ……「ノーソンくらぶ」（大分）は、近隣に居住する住民（多くは高齢者）が同店舗に運んで来た野菜等を販売している。

・農家からの持ち込み……「青空市」(熊本)では、生産者が自分で値段を決めて店舗に陳列。生産者は同時に前日の売れ残りを回収するため、店舗は在庫を抱えない仕組み。

・地元住民の栽培した野菜を販売……茶屋の原団地自治区会は、元スーパーの軒先や駐車場を利用して「ふれあい朝市」（北九州市）を開催。地元住民が栽培した野菜を販売。

■「多機能化・共同化」による仕入れコストの削減事例

・共同配送によるコスト削減……島根県の中山間地域に配送を行う卸売事業者 9 社が共同配送会社を設立し、配送費の割合を 16%削減した。

・チェーン加入によるコスト削減……JA 広島ゆたか（広島）は、山崎製パン Y ショップに加盟することにより、納入トラックを集約し、仕入れコストを削減。

・地元スーパーによる個人商店の仕入れ支援……スーパーやまと（山口）は、個人商店を組織化し、自社店舗の在庫を原価で卸すことで個人商店を支援する事業を行っている。

そして、特に成功事例・失敗事例の教訓から言えることについて以下のようにまとめています。

・「買い物弱者」対策において PPP が成功するためには、地域・事業者・行政といった各々の主体が、役割分担を図りつつ、連携・協力を深めていくことが不可欠である。その鍵は、「地域住民との連携」にある。

・行政への過度な依存は事業の「継続性」を失わせる危険もある。たとえ行政からの支援があったとしても、永続的支援が担保されるものではないため、補助金に頼らない経営基盤を築いていく必要がある。特に、過疎地域においては、継続性のある「買い物弱者」対策を持続させるためには、地域住民との連携は不可欠な要素となる。

・その際、地域住民の意識転換も不可欠である。過疎地域において、地元密着型の中小商店が衰退した要因の多くが、地域住民が郊外型スーパーに買い物に赴き、地元の店舗を利用しなくなったことに起因する。過疎地域では、高齢者が「買い物弱者」に陥る一方、自家用車を有する若い世代が郊外型スーパーに買い物に出かける“二重構造”が存在している。より安く、より多くの商品を扱う郊外型スーパーでの買い物は確かに合理的な経済行動ではあるが、一人一人の合理的な行動の集積が「合成の誤謬」となって、近場の商店（街）の衰退をもたらして来たのも事実である。この点について、地域住民が地域に対する責任意

識を持って「買い支え」を行う意識の醸成が求められる。

・過疎地域においては、「地域の買い支え」が無ければ店舗を維持することは難しい。いずれは誰もが高齢者となり、「買い物弱者」となる可能性がある。その意味で、消費者一人ひとりが、もっと賢くなる必要がある。「買い支え」は住民にとって負担の増加であっても、自らが高齢になり、「買い物弱者」となった時ための“投資”と考えるべきであろう。

・店舗側も「地域住民のニーズは何か」を積極的に汲み取り、地域と一体となって、提供する商品やサービス、店作りに丁寧に反映していく姿勢も重要である。その意味で、住民が店舗の運営・経営に積極的に参加し、工夫を重ねていく「買い物弱者」対策こそが理想である。

今回の調査では、ミニショップヤマモトのオーナーである山本静枝さんからも大変貴重で示唆に富んだ話を伺うことができました。そして、経営者としての苦労、努力、地域への愛を感じ、このことを住民の皆さんに伝えることもまた私たちの役割であるとも考えています。そこには経営者ゆえに住民の皆さんに頼みづらいと思われる「買い支え」も含まれています。

言うまでもなく、高齢化・過疎化が進行する現代において、住民の皆さんの生活に関する諸課題は山積しています。本調査の結語として、買い物環境を維持・改善していくことは、行政だけではできず、民間だけでもなし得るものではありません。

特に、先述の「地域住民の意識転換」などは住民の皆さんに負担をかけることと思いますが、これまで、多寄地区に長年住んでこられた皆さんだからこそ見えているもの、見失っているものを整理し、住民、企業、行政等の創意工夫の下に諸課題に立ち向かっていく姿勢が求められています。

以上のことについて、結論を急ぐのではなく、住民も行政も自分たちは何ができるのかということの議論からスタートさせてほしいと切に願う次第です。

最後になりますが、全国的に見たとき、たとえば、「行政がやってくれる」「行政はやるべき」「諸費用の負担はしたくない」と思う住民が存在します。また、「経済的支援はできない」「住民の自助努力で」「民間の活動には関われない」と考える行政も存在します。それぞれその主張はよくわかりますが、その発想では既存に枠組みに挑戦できないものと思われます。すなわち、そのような住民と行政の協働では、この状況・問題に未来はないことは申し添えます。

名寄市立大学
買い物環境づくり研究事業
報告書

2022 年 3 月発行

発行・編集：名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター
所在地：名寄市西 4 条北 8 丁目 1
TEL：01654-8-7661
E-mail：community@nayoro.ac.jp